
ダンデライオンの花嫁

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンデライオンの花嫁

【Nコード】

N1495U

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

平凡に過ごしてきた女子高生がある日突然異世界トリップ。
いきなりどこの誰とも知れぬ人に嫁げといわれました。
ちよつと待てと。何がどうしたらこんな目にあうのですか神様コノヤロウ。

勢いだけで出来ました。

更新は亀の歩みでございます。

度々文章を修正する癖あり。

文章の一つ一つは短いですが、
さくさく読めるかと。

文章改定（7 / 18）ジャンル改訂（7 / 19）

青いそら（前書き）

見切り発車で始まりました。
更新はまちまちです。
ご了承くださいませ。

青いそら

今まで、ただ平凡に生きてきたつもりだった。

頭は中の中、運動神経はないが特別突出することなどなく。

反抗心ばりばりだった小学生時代はさておき、それからは大人しか
つたはずだ。

同級生の中に埋もれていた自信すらある。

極力波風を立てず、大人しく、ずっと影と寄り添うようひっそりと
過ごしてきたのに。

・・・そうですね。

確かに、生来の口の悪さはちょっとどうしようもなく、昔は大層な
悪餓鬼でした。

気に入らない輩には悪口雑言を吐き、男子と喧嘩も当たり前。

しかも、今は名残も見当たらないが、昔はちっこかった。

なのに負けん気だけは誰よりもありました。

おかげで泣かした男子は数知れず・・・女子としてはあるまじき姿
でした。

ええ、それは若かりし頃の過ちということで、黒歴史となっております。

けれど、それだけなら他の誰しもが通る道でしょう。

一体何が起きたらこうなりますか、神様。

・・・あんまりだ。

「じいどじ」

ぼつり、呟いた声は誰にも応えてもらうこともなく、大気に溶けた。そよそよと心地好い風が髪を撫で、足元の緑がさわさわと揺れる。暑くもなく寒くもなく、お日様は優しく大地へとその光を惜し気もなく降り注いでいる。ただ散歩にきただけなら気持ち良く過ごせただろうに、今はそんな気分には到底なれなかった。

ああ、どうして。

「・・・どこなのよ」

続けて呟いた言葉が虚しく空へと消えてゆく。

ここには自分一人しかない。

よって、応えてくれる誰かもない。

それを痛いほど感じてはいても、呟かずにはいられなかった。

あいする日常

その日も、いつも通り何事もなく授業を終えた。

部活も無事に終了し、気分良く帰宅しようと荷物を手早く纏める。

うら若き学生、しかも華の女子高生であるアキは、基本的にお家大好きインドア派である。

学校も部活も嫌いではないが、やはり家が好き、おまけに自室に籠るのが好きとくれば、帰宅に向けるその足が軽くなるのも無理もなかった。

「あれ？アキ、もう帰るの？」

カバンにせっせと荷物を纏めていたアキに、友人が声をかける。顔を上げてその姿を見れば、まだ部活終了後そのままの姿だった。彼女はこれからもう少し居残るつもりなのだろう。

アキは徒歩だが友人はバス通学なので、帰る時間までまだ少し猶予があるのだ。

「うん、ごめん先帰る。まだやってくの？」

「あと30分くらいやって帰るよ」

「そっか、頑張ってたねー」

「アキも気をつけてねー」

帰る準備が出来て、荷物を持って立ち上がる。

ばいばい、とお互いに小さく手を振り合い、それぞれ歩き出した。

これが最後の会話になると、誰が思っただろう。

このとき、何も知らないアキは何を思うでもなく、いつもの通りに出口へと向かった。

「お疲れ、アキ」

「ばいばーい、またねー」

「アキ先輩、お疲れ様でした」

「はいはーいお疲れー、お先ー」

声をかけてくる部員達にそれぞれ挨拶をして、アキはさつさと部室を出る。

その手には通学カバン以外に、珍しくも自身の相棒を抱えていた。

「クラは軽いから助かるわ」

自分より細い友人がチューバを抱える姿を思い出し、思わず呟く。
吹奏楽部であるアキの担当はクラリネットだ。

木管楽器であるそれは、端的に表せば組み立て式の縦笛であり、崩せば持ち運びも楽々で、ものぐさなアキにはなんとも都合の良い楽器といえた。

「さあて、帰ったら練習練習」

楽しげに笑う姿は、傍から観ればなんともご機嫌な様で。

興味のないことにはやる気もないが、アキは練習が嫌いではない。

そして、音を奏でるのはとても好きだ。

家はど田舎の一軒家で、周りに住宅もないため、アキは度々自室で練習をすることがあった。

アキはその日一日が順調に終わりそうであることを確信し、機嫌良く階段を駆け降りた。

ここで注意をしておけば良かったのかもしれない。

常日頃から、良いとは言えない運動神経を過信したつもりはなかった。

なかった、のに。

「あっ？」

手摺りに捕まりながら、うっかり勢いづいたのが、恐らく悪夢の始まりだろう。

アキは踏み出すはずの右足を滑らせた。

そうして間抜けな奇声をあげ咄嗟に目を閉じると、アキの身体は呆気なく階段から落ちてしまったのだった。

世界はうつくしい

さわさわと風に揺れる植物の音を聴きながら、呆然とする。目の前の光景が、体を感じる風や音が、受け入れられない。階段から落ちたのは、つい数分前のことだったはずだ。

脚を滑らせ、階段から堕ちると理解した。

その次の瞬間、襲ってきた恐怖心と浮遊感に咄嗟に目を瞑った。来る衝撃に身を強張らせること数分後。

いつまで経っても痛みが来ないことに気づくと、漸く目を見開いて、次の瞬間に瞠目する。

「・・・・・・・・へあ・・・・・・・・」

呆然としすぎたせいか、無意味な言葉が転げ落ちた。

あまりの開放感と理解不能な事態に、頭が思考することを放棄したらしい。

口から出てゆくのは意味を持たない言葉ばかりだ。

草原？青い空？

わーい清らしいって・・・いや、待て落ち着け私。

もしかして階段から落つこちで、頭打って失神中なのかもしれない。むしろ私生きてるのか？

まさか死んだなんてことはないよね？

ここは三途の川には見えないし、天国にも見えない。

夢なんだよね？そうだよな？

・・・誰か答えるこのやろつ。

「・・・すーがすがしい・・・」

黙っていることが身に堪え、無意味に呟く。

現状を認識できませんとばかりに、頭が混乱し続ける。

アキは、蒼い草原に1人立ち尽くしていた。

見渡す限りの緑と、爽快なまでに晴れた空。

大草原のど真ん中にぽつんと点を穿つかのごとく、アキはただそこにいた。

何故なのかは皆目検討もつかない。

学校に居て、部活が終わって、帰ろうとしていただけだ。

身体能力の低さを意識せず、うっかり階段から足を滑らせてしまいはした。

それでも、それだけでも、アキがこんなところに居る理由にはならないはずだ。

なってもらっちゃ困る。

「ええと・・・だれ・・・も、居ませんね・・・」

乾いた喉を無理矢理動かし、呟く。

見渡しても、草原と空しか目に映らない。

つまり、ここにアキ以外に人がいない。

「・・・ははっ・・・なんだそれ」

なんとも言えず小さく笑ったあと、ため息を吐いて黙り込み、その場に座り込んだ。

何度瞬きをしても、景色は変わってくれない。

目を思い切り瞑ったまま数秒後、また開けてみても状況に変化がない。

頬を思い切り抓り、涙目になった後も、周りの景色が変わることは

なかった。

ただ夢ではないのかもしれないという思いが強くなったただけだ。
何がどうしたらこうなるんだろう。

ここはどこで、私は一体どうなったの。

アキの頭はパニックに襲われていて、思考もままならないことが何故か悲しかった。

「・・・あ・・・？」

どれくらいそのままだったのだろう、顔を上げたままだったアキの視線上に、黒い点が現れる。

青い空と碧い草原の地平線上に穿つ黒点は、どうやら動いているようだった。

何だろう、あれ。

上手く動いてくれない頭で考える。

結構早いその黒点の動きを観て、どうやらこちらへ近づいてきているらしいことに気づく。

ざっざっざ、と草を掻き分ける音が僅かに聞こえてきたあたりで、ぼんやり眺めているだけだったアキの目が瞬いた。

あれはどうやら人型らしいことに気づいて、縋るような思いと歓喜に体が震える。

しかし次の瞬間に、さあっと血の気が下がった。

もし、あれが『良い』人でなかったら？

アキを見つけ、害するような人種だったら、どうする？

もしくは、思いたくはないが、人ではなかったら？

アキが無事で済む保障など、どこにもない。

「うー……」

アキは希望と恐怖に戸惑い、逃げることも出来ずにその場に留まった。

顔は今にも泣き出しそうに歪んでいる。

未知の場所と未知の生き物には、やはりまずは恐怖を抱くものだろう。

それでも現状解決の糸口かもしれない存在を前に、逃げることは憚られた。

恐怖よりもそれに縋りたい気持ちが強かった為ともいえるが、ただ単に怖くなって腰が抜けただけである。

いつのまにか座り込んでいたその体勢のまま、やがて現れた黒い人を見上げた。

はじめましてこんにちは

がさり、草を踏みしめながらアキの側にやってきたのは、大きな黒尽くめの人だった。

座った大勢のまま、視界に入ってきた足から徐々に上へと視線を移す。

丈夫そうな大きな靴に、がっしりした脚は黒いズボンを纏っている。腰には焦げ茶のベルトが幾重にも巻きつけてあり、小さな袋がいくつか提げられているところで一度止まる。

そうして、恐る恐る、再び視線を移動させ、マントで隠し切れない上半身を見た。

その服の上からも分かるほどの腹筋の割れ具合にまた固まる。

ゆっくりゆっくり、視線を移動させているアキに何故か黙って付き合っている目の前の黒い人。

体の造りから、男性なのだろうと思う。

重そうなマントが風に揺れる様を目の端に止めながら、視線を移動させるのを止められず、アキは内心困惑していた。

どうして、怖いのに、やめられないの。

怖いなら見なければいい。

そんなことは、わかっているはずなのに。

覚悟を決めて、その顔を見やる。

ぐ、つと首を仰け反らせなくては、彼の人の顔は見えなかった。それほどまでに高身長なのだろうと思ひながら、その顔を見て今度こそ完全に思考が止まる。

黒い髪を短く刈り込み、さわさわと風に遊ばせている様はこの草原にも似ている。

しかし、その切れ長の青い瞳は、さながら猛禽の目だ。眼力が半端ない。

それどっから持ってきたのってくらい殺気が籠められている気がした。

薄い唇は真一文字に結ばれ、伶俐な印象を与える。

おかげで、暖かい草原にブリザードが襲っているような気分になった。

見てくれだけを言えば、きつと整っている。

でも、なんだろう。

人の顔見て、こんなに怖い思いするのは、初めてです。

ピーンと固まったアキをじつと見下ろしながら、黒い人とアキは
図らずも見つめあう形で暫し止まった。

アキは何もいえなくなっているし、何故か黒い人は無言でアキを見
下ろすだけ。

じわりと目の端に涙が溜まってしまっても、アキは責められないだ
ろうと思った。

暫しの後、漸く黒い人が動いた。

「・・・ひいつ」

す、とその身を屈め、アキの顔を覗きこむ。
思わずアキの口から悲鳴が漏れてしまった。

その悲鳴を聞いてか、ぴくりと黒い人の眉間に皺が寄る。

アキは続けざまに放ちそうになった悲鳴を慌てて飲み込んだ。

涙目が治らない。

これは無理だ。

がたがたと震えだしたアキをじつと見つめ、黒い人が更に体勢を低
くした。

低くしたって怖いものは怖い。

むしろ顔が近くなって余計怖い。

気絶したい。

アキの脳内をぐるぐると、相手にしたらきつと失礼な言葉が巡る。

体が動きません助けてくださいけどごめんなさい目の前の黒い人じやなくて他の人誰か居ませんか黒い人怖い男の人怖い神様でもいいからっつーか神様出て来いなんでもいいから誰か来てとりあえずこの空気なんとかして！！

お互いに一言も発しないことに嫌気が刺したのか、動いたのは黒い人のほうだった。

ちなみにアキは指一本すら動かせなかった。

「・・・ひいつ・・・つつきゃーーーーー！！」

次の瞬間には、アキの悲鳴が草原へ響き渡った。

黒い人はアキを抱き上げ、俵のように肩に担いだのだ。

突然の浮遊感と現状を理解したくない脳内は、先ほどよりもっとパニックに陥った。

何も考えられず、ひたすらじたばたと暴れた。

「やーーーーいやーーーーーふぎゃーーーーー！！！！」

「・・・煩い、それ以上暴れると落とす」

錯乱して奇声を上げ続けるアキに、ようやくぽつりと黒い人が言葉を投げつける。

それはあんまりじゃないか、なんて正気なときなら思っただろうが、今のアキにそんな余裕はない。

しかしその声にびくりと体を震わすと、瞬く間に大人しくなった。そうしてそのまましくしくと泣き出す。

黒い人はちらりとアキを見たが、黙って歩き出した。

出会いは、後で思い返しても最悪な印象をアキに植え付けるものだった。

みとめたくない現実

泣きすぎで息が苦しいです。

いきなり現れた黒い人に、がつり肩に担がれて暫し後。
為す術もないアキは、泣きながらもとりあえず大人しく担がれていた。

「うえっ・・・ぶ、ぐ・・・うっく」

「・・・・・・・・・・」

ざっざっざっ、という規則正しい足音と情けない泣き声だけが辺りに響く。

いつの間にか草原を抜け、岩に囲まれた谷のようなところに出ていた。

泣き始めて小一時間。

そろそろ泣き止みたいところだが、アキ本人にも止められなかった。我慢しようにも、涙が後から後から零れていく。

不安感と怯えが拭えず、どうしても堪えられないのだ。

それにしたって我ながら涙腺弱すぎます。

ちよっと自重しようか自分。

・・・心底自重したくても出来ないんだけども。

しかし、アキがどれだけ泣き続けようが、黒い人は何の反応も返さ

ない。

その反応のなさがなんだか恐ろしいが、酷いことは（問答無用で担当されて運ばれているが）今の所されていない。

怒っている様子も、ない、ように見える。

身に迫る危険がなさそうだとわかり、おかげでだんだん落ち着いてきた。

それでも涙は止まらないが、そこはもう諦めよう。

泣きながら、アキはぼんやりしてくる頭を叱咤して、必死に考えていた。

まず、これは現実か否か。

夢であるといわれることがベストだが、なんだかあまりにも現実感がありすぎる。

身体が感じる風や光も、涙が出ることも、それによる呼吸の苦しさも。

今まで夢でこんなにもリアルなものを見たことがなかった為、判断に迷う。

しかしこちらへ来てしまった、その方法を考えると、どうにも信じがたい。

学校の階段から落ちたのに、どうして眼を開けたら大草原のど真ん中に居ることになるのだろうか。

説明しろ誰か。

原因が居るなら、神様だろうが魔王だろうがなんでもいい、出るなら今出てこい。

じゃなきゃ納得出来ない、いや、したくないけど、でもやっぱ納得できないことは気持ち悪い。

そして突然現れた、黒い人。

名前も素性もわからないのに、突然現れたと思ったら、掻っ攫う様にアキを担ぎあげ現在に至る。

………ん？

……あれ、これわたし攫われてるのだろうか。

ようやく現状を確認する気になって、そこではたと思いつく。

お互い何も知らない同士でありながらも、この黒い人の歩みは揺るぎ無い。

つまりは何処か目的地があるということではないか。

そして多分、この人はわたしが何なのかをある程度は知っているということだ。

そうでなくては、どうして見ず知らずの人間をいきなり攫うようなことが出来るだろう。

人攫いのように売り飛ばすとか奴隷にするとかも無きにしも有らず、だが。

まっすぐわたしへ向かって来たのだから、その線は薄いように思う。そう考えると、何でわたし？とか、何が目的？等色々考えることはあるが、現状はアキにはどうしようもなかった。

なので、それもとりあえず置いておく。
そうして今一番気になるところは、この黒い人の腕力と体力の有り得なさだった。

・・・あの、だってわたし、結構大柄なんですよ、ほんと自分でいうのも悲しいですが。

確かに昔はちっこかったんです。

小学生低学年までは、列の前から1番か2番でした。

しかし高学年になった頃から、あれよあれよと育ってしまい。

高校2年生になった現在は、身長165?でいわゆるぽっちゃり体型なんです。

それをあろうつことか何の苦もなく肩に担ぎあげちゃってるこの人。

どんだけ力持ちなの?

担ぎあげ、かつずっと歩き続けているのにも関わらず、その歩行にも呼気にも疲れは見られない。

見た目から鍛え上げられていると判断がついたが、それでも信じられなかった。

いや、わたし自分がどんだけ重いかわかってるもの。

そこはね、現実をね、見ないとね・・・あ、やばいまた涙の量が増える(そして止まらない)

ぐるぐる巡る思考は、1人だけで考えていても、どれひとつとして解決なんてしてくれなかった。

ただひとつわかるのは、アキがどうあがこうと、この黒い人には敵わないということだ。

きっと、この人にとってアキ一人、なんとも出来るのだろう。

何も出来ない、何の力も持たないただの一般人のアキなど、殺そうと思えば容易いものだろう。

だから、本当ならば殺されていても可笑しくないこの現状でまだ生きていられるのは、この人が少なくとも今はアキを殺すつもりがないということなのだ。

そうなってしまう、そのときまでは、この人に縋るしか術はない。

ならば、今アキに出来ることは、この人に大人しく従うことだ。

・・・でもやっぱこわいよおかーさん、と無意味に脳内で呼びかけながら、まずは涙を止めることに尽力しようと思った。

閑話 その時の黒い人

ぐずぐず、と鼻を吸りながら、肩の上の少女はようやく泣き止みかけているようだった。

行くべき場所を指示され、出向いた先で見つけた1人の少女は、広大な草原の中でへたり込んでいた。

目の前まで行きつき何も言わずにしていると、少女が足元へと視線を寄せてきたことを受け、したいようにさせてみることにした。

それからこちらを見定めるかのようにゆっくり頭をあげていくのを、尚も黙って見守っていると、何を思ったのか腹あたりまで行ったときに一旦視線が止まった。

ぴくりと小さく身体が揺れる様は、怯えた野生動物を思い起こさせる。

暫し逡巡の後、少女がぐつと首を起こしこちらの顔を見つめ、今度こそ完全に固まった。

昔ならまだしも、成長してからは、対峙した相手にこんな反応を返されることが度々あった為、そのこと自体には何の感情も湧いてこない。

まあそうなるだろうな、と内心でひとりごちながら、とりあえず少女が復活するのを待つ。

待ちながら、することもない為少女を観察することにした。

色素が薄いのか、綺麗な茶色の髪は背中の中半ばあたりで風に遊ばれ

ている。

さらさらと揺れる柔らかそうな髪質は思わず触りたくなってしまったものだったが、そんなことをすれば怯えられるのは明白だったため、ぐつと堪えた。

太陽の光をきらきらと反射しているためか、見ようによつては後光を背負っているようにも見え、少女がここに居る理由について、表情に出すことなく1人で納得する。

少し黄色がかっているが充分白い肌は肌理細やかで、これもまた触り心地が良さそうだった。

じつと目を見つめると、図らずも少女と目が合う形になった。

ぱつと目で黒いように見えた目はよくよく見ると焦げ茶色をしていて、それが少女に柔らかい印象を与えている。

大きい目は零れてしまふのではないかと思うほど開かれ、顔色は青白い。

形のよい唇は色を失い、今にも倒れてしまいそうだ。

それでも見つめ続けると、少女の瞳にじわりと薄い膜が張られた。

あ、と思う間もなく、見る見るうちに少女が涙目になった。

見下ろすから余計怖いのか、と少女の目線にまで下りるためにその場にしゃがみ込む。

そう早くはない動作で腰を下ろせば、一緒に少女の視線もくつついてきた、が。

「ひいっ」

小さく悲鳴を上げられてしまった。

その声を聞いて無意識に、そして瞬間的に、眉間に皺が寄る。それを見た少女は慌てて自身の口を自分の両手で塞ぎにかかった。

どうやら余計怖がらせてしまったらしいことに、今更気づく。ふるふると震えだした少女を前に、尚も姿勢を低くしたが、それでも変わりはないようだった。

しばらく待ってはみたが、少女の様子が落ち着く気配がなさそうなので、次の行動に移ることにした。

「……ひいちゃん……」

ぐっと少女に近づき、その体を持ち上げ、肩に担ぐ。

少女から悲鳴が迸つたのをなんとなく頭の片隅で聞きながら、来た道を引き返すためにくるりと体を回転させたが、それで余計に恐怖を煽ってしまったらしい。

「やーいーやーいーふぎやー! !」

猫の子のようにじたばたと暴れだす。

その抵抗は正直に言えばなんてこともなく。

しかしいくらこちらに落とすつもりはなくても、このままではなんとも心許ない。

おまけに耳の傍で叫ばれて、鼓膜が震えた。

「……煩い、それ以上暴れると落とす」

ぽつり、呟くように告げれば少女の体がびくりと震えたかと思うと、
ぴたりと止まる。

瞬間におとなしくなった少女に内心で驚いていると、そのまましくしくと泣き出してしまった。

・・・泣かせたい、わけではなかったのだが。

そんなことを思いながらも、自分ではこれ以上何しても無理だろうと結論づける。

国へ帰れば、自分よりも彼女を宥めるに相応しい者が居るのだ。ちらりと肩の上の少女に視線を向けると、今はとにかく早く帰ろうと足を踏み出した。

喪われたじかん

泣き止む為には相当の努力が必要だったが、ようやく目から涙が落ちることはなくなった。

ただし、あまりにも泣きすぎた為に目はぱんぱんに腫れ上がって、今はやや視界が狭い。

おまけに頭がちよつと痛みを訴えつつ、朦朧としてしまうことは否めなかった。

それでも、この体勢が地味に辛いということだけはわかる。

腹が・・・腹が圧迫されてそのうち何か出ちゃいそうです・・・

広い肩に乗ってるので多少負荷は減らせているとは言え、腹部に全体重がかかっているのは事実である。

どれだけ時間が過ぎたのかは定かではないが、それなりに時間は経っているはずだ。

何しろ、こちらに來たときは中天にあつた太陽がいつの間にか沈み、辺りには夜の帳が訪れようとしているのだから。

そして現在は断崖絶壁に囲まれた、なかなか広い谷を移動中だ。相変わらず、黒い人の歩行には微塵も揺らぎがない。

きつとあまり負担にはなっていないか、この黒い人が相当なパワーフェイスの達人だということなんだけど。

いつしか、心苦しいという気持ちがじわりじわりとアキの心中を侵すように拡がっていた。

ていうか、いくらなんでも、このままは色んな意味で辛いです

よし、降ろしていただろう。

意を決したアキは、震えそうになる体を叱咤しながら、黒い人へ初めて声をかけた。

「あ、あの・・・」

「・・・・・・・・」

規則正しい、ざっざっざと聞こえる足音が、やけに大きく聞こえる。返事も反応もないことに内心で頂垂れた。声が小さかったのか、と、ぐつと腹に力を入れなおす。

「あっあのーっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

えっと・・・・・・・・すみません、ちょっとは反応が欲しいです。

「・・・・・・・・あのっちゃうとすみませんっ！！・・・・・・・・うひいっ」

些か耳元に近いところで叫ぶように声をかけると、その瞬間にぴたりと黒い人が立ち止まってしまい、うっかりまた悲鳴を上げてしまった。

や、だって怖いんだもの。

怒らせたら私死亡決定ですよわかります。

でもすっかり声が出ちゃうのはもう仕方がないんだ。
本気で生きている女なんですチキンですみません。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ」

沈黙長いわっ！

ようやく返ってきた答えに、思わず脳内で突っ込む。
しかし、ここで怯むわけには行かないのだ、と再び腹に力を籠めた。

「あの、そろそろ降ろしていただけませんか」

恐る恐るそう告げれば、また沈黙が続いた。
どうやら何か考えているらしい黒い人を見ながら、ふつつつと疑問
点が湧いてくる。

何でそんなに悩むんだ。

降ろした途端に逃げると思われてるのか。

それとも私が足手まといになるのが目に見えてるからか。

そこは正解かもしれないが、それでもずっとこのままでいけるわけ
がない。

どこに向かっているか知らないが、歩いてすぐ着けるような場所ではないように思う。

それにそろそろ日が暮れるのに、何処かで野営をするのなら、そろそろ準備すべきではないのか。

悶々と考えていると、するりと肩から降ろされ、眼前に黒い人の顔が現れた。

右手は背中に、左手は両足を支えている。

つまりは、お姫様だつこというやつに移行したらしい。

なんで！！

今度は悲鳴を上げることなかったが、びくりと体が震えてしまったのは許して欲しいと思う。

しかし、次の瞬間には、なんだか面白いものが見れた。

「・・・っ！」

あんまりにも酷い顔だったからだろうか。

黒い人が驚愕に瞠目し、固まったのがわかった。

泣き過ぎれば大体はこうなるんですよ、乙女の顔見て怯まないで頼むから

それにしても黒い人がそんな普通の人のような反応をするのが、なんとなく愉快に思う。

そうして、次に自分の心に湧いてきた思いに困惑した。

ああ、この人もただの人間なんだなあ、なんて

私は一体彼を何だと思っているのだろう。

いくら人攫いまがいな人でも、ひとはひとであることに変わりはない。

自分の傲慢にも似た思いに戸惑いながらも、小さく息を吐く。

落ち着いたと思ったが、どうやらまだ混乱が続いているらしい。

まあそれも当然だろうな、なんて1人で結論づけると、ひとまず黒い人の反応を待った。

「……気をつける」

暫し後、ぽつりとこちらを心配するような言葉を寄越しながら降ろしてくれる黒い人にちらりと目を向け、数時間ぶりの地面に降り立つ。

脚が頼りなくふらつくのを必死で堪えていると、黒い人がさり気無く側に立って支えてくれた。

上から見下ろしてくるその目には、なんだか労わりの色が見えるような気もしてくるから不思議だ。

そのことにまたちょっとびっくりしながら、少し慣らしのつもりでその場足踏みをした。

それから、黒い人がゆっくりと歩き出したのを見て、その後ろに続く。

コンパスの違いからどうしても小走りになりがちなアキを気遣うように、ちらちらと伺ってくる前方の人を見て、アキは既にこの黒い人を恐れていない自分に気づいていた。

顔は怖い、雰囲気そのものには慣れたらしい。

刷り込みの一種だろうか。

初めは最悪だと思った。

いきなり現れ、掻っ攫うようにアキを連れてきたのだ。

不審に思いこそすれ、慕うことなど通常なら在り得ない。

しかし今は、この人が私に多少なりとも気を使ってくれているのがわかる。

我ながら単純すぎると思った。

暴力を振るわれたわけでも、睨まれたわけでも、罵られたわけでもない。

だから、信用したい、なんて。

他に縋る者が居ないからだ、なんて無理矢理自分に理由づける。そう、このわけのわからない状況で、他に頼る者など居ない。私はこんな状況を1人で乗り越えられる程の強さもない。

騙されたら、それは私が勝手に騙されたのだ。

そう思えばいい、と内心で自分を納得させた。

「今日は、ここで寝る」

「・・・はあ、」

しばし歩いた先で見つけた岩棚の前で、黒い人はアキにそう告げた。

野宿。

なんとも言えずに間の抜けた返事しか出来なかった私は現代っ子です。

文明の利器に囲まれて育ちました。

テントで寝たことがあるのは1度だけです。

アウトドアは、大変苦手な分野です。

それが。

野宿？

呆然と立ち尽くすアキを放置して背を向け、黒い人は手早く準備を整えていく。

あちこちにまばらに生えていた枯れ木を集めると、懷から取り出した火打石らしきものを使って、火を熾す。

そして今度は腰に下げている袋から、なにやら葉っぱのようなものを取り出すと火にくべた。

余った薪は、近くに積み上げておく。

それからアキにほづを振り返ると、小さく手招きをした。

アキは黒い人の側まで小走りで近寄ると、岩棚の側に大きな亀裂が走っていることに気づいてそれを見上げた。

それは大人1人が十分通れるような広さがあり、奥へ奥へと続いていた。

アキが近づいてきたことを確認すると、黒い人はその亀裂の中へ入っていく。

何処へ行くのかと疑問に思いながら着いて行くと、水の匂いを感じて、心が浮いた。

「わぁっ……」

ちよつと歩いた先には、綺麗な泉があつた。

黒い人がいつの間にか手に持っていた筒に水を汲んでいるところを見ると、これは飲用していいものなのだろう。

ぱたぱたと泉に走りより、その淵へと膝をついて、鏡のように澄んだ水面を覗き込んだところで思わずびしりと固まる。

「・・・あ・・・あれっ・・・」

えつと・・・こちらを見返してくる女の子は、一体誰でしょうか。

一瞬茫然とし、そのまま勢い良く手を水面へ突っ込む。

瞬く間にかき消された女の子は、水中に誰かが居て、アキの見つめているわけではないらしい。

水面が落ち着くまで待つと、その女の子はまた現れる。

今度は水へ手を入れることなく、眼前でひよいひよいと手を振ってみた。

ついでにぐい、と頬を抓つて、痛い思いをする。

水面の女の子は痛そうに顔を歪めていた。

同じ行動をする・・・つまりこれは、認めたくないけれども、私なんですネ。

「っえーーーー！！！！！！」

今、気づきました。

どちら、私・・・縮んでしまっているようです。

喪われたじかん（後書き）

展開が果てしなくゆっくりな予感（今更）

つきつけられる試練

水面から見返してくる姿は、記憶の中にある幼い自分で。

「えええええええええ、ちよつま、なんつ・・・！これだれ！わたしか！！・・・ううええええええ」

泉を覗き込む体勢のまま、無意味に奇声を発する。

いやいやいや、待ちなさいよ。

ちよつと可笑しいだろうこれ。

どういうことだ。

誰だ責任者ほんと出て来いって。

なんで、わたし、幼児になつてんの！！

ふひゃーと口から奇声が出てゆく。

がくがくと体が震える。

力が入らないといつてもいい。

頭が混乱して、何が何だかわからなくなった。

「・・・おい」

「いやいやいやおおつかしいいつてえええええ」

どうしようもなくなり、うぎゃーーーーとばかりにごろごろ転がってみる。

まさにその姿は幼児が駄々こねているように見えるだろう。

いや、でもこれほんと受け付けないよ。

こんな展開ほしくなかった。

今までの展開を許容した私をほめて欲しいくらいだった。

よりにもよって幼児！

いっつあすもーる！

道理で黒い人がやたらでつかく見えるわ軽々と運ばれるわだよ！

そら子供ならそつなるだろうさ！

「・・・おい、大丈夫か」

黒い人がいつの間にか跪き、こちらの顔を心配げに覗きこんできた。しかしそのことに頓着する余裕は、今こちらには欠片もない。

これが大丈夫に見えるならおまえの脳みそ疑うわっ

完璧八つ当たりに近い暴言を胸中で吐き散らし、ああああと奇声を発しながら蹲る。

一旦パニックになった脳内は、すぐには落ち着いてくれない。だんだん呻くだけになりながら、頭を地に着け、丸くなる。

ようやく乾いたはずの目が潤んだのを知りながら、脳内で同じ問いを繰り返した。

ああ、どうして。

どうして、こんなことに。

私が一体何をしたのですか。

ここがどこで、何が起きて、私はどうなっているの。

どうして。

どうして、どうして、どうして。

「うっ……」

「……………」

蹲ったまま動けなくなったアキの頭に、ぽんと暖かい大きなものが被さってきた。

それが黒い人の手だというのは想像に難くない。

抵抗することもなく黙っていれば、そのまま軽く頭を撫でられる。

その意外なほど優しい手つきに、自分以外の温もりに、自身がだんだん落ちていくのを悟った。

数分後、黙したままアキは頭部に置いてある手をそのままに、ぐいと体を起こした。

目線だけは地面に置いたままぐしぐしと乱暴に目元を拭くと、黒い人に止められる。

そしてすぐに冷たい布を目に充てられ、びっくりはしたがその心地よさにされるがままになった。

頭ががんと痛む。

もう、今は何も考えられない。

くたりと力を抜いたアキを少し上向かせ布を乗つけると、黒い人はそのままの体勢のアキを軽がると抱き上げた。

今度は肩に担ぐでもお姫様だつこでもなく、自分の片腕にアキを座らせる形だ。
そうしてアキを自分に凭れさせ、安定させると泉から離れ岩棚へと向かった。

黒い人は焚き火の前にして暫し黙考すると、それをそのままに岩棚を背にして座り込んだ。

視界が布で覆われているアキがいつの間にか眠りに落ちていたの
いいことに、自分のマントでアキを包み込む。
そしてその場にごろりと横になった。

アキは自分の腹の上に寝かせ、両腕で抱きこむように支える。

静かな湖のような青い瞳で夜空を見つめると、黒い人もまた黙って目を閉じた。

驚愕のじじょう

ちゅんちゅん、なんて聞こえるはずもない幻聴を、ひどく懐かしく思った。

「・・・・・・・・夢じゃ、ない・・」

目が覚めて、第一声がそれだった。

もとより朝は弱いアキが目を覚ますまで暫しの猶予が必要だ。

ぱちりとは素直に開いてくれない瞼をこじ開け、少し頭を上げて辺りを見回す。

周りは岩だらけ。

景色は、昨夜のものと変わらない。

これは、夢じゃない。

再度突きつけられた現実にげんなりしながら、自分を包む布へと顔を押し付けたところでようやく気づいたことがあった。

「ん？」

これは、まさか？

ゆっくり起き上がり、黒い布を手に取り広げてみる。
やっぱりそうだ。

これは黒い人がつけていたマントだろう。

貸してくれたのだろうが、当の本人が辺りには見当たらない。

怪訝に思いながらも立ち上がり、マントについた大きめのゴミを払うと手早く畳み、胸に抱える。

そのついでに自身の体を調べてみた。

昨日の記憶の中、顔だけで判断するとするなら、今の見た目はどうやら6　7歳頃の自分だ。

まだまだ他の友達に比べ、小さかった頃の。

なのに着ている衣服は、高校の制服なのでかなり驚いた。

それもぶかぶかになっているわけではない。

ブレザーもスカートも靴も縮んだかのように、ぴったりなのだ。

つまりは高校生のコスプレした少女？

ちーん。

どこかで誰かに何かが鳴らされた気がした。

ちなみにカバンと大事なクラリネットは攫われた時草原に置いてきってしまったらしい。

唐突に起きた出来事にパニックになり、それらを考慮する余裕はなかったのだ。

その事実を思い出し、思わず遠くを見やる。

……ダブルパンチです。

「起きたか」

「・・・おはようございます」

遠い目をして現実逃避をしているところで、黒い人が戻ってきた。
挨拶をしたあと、はい、とマントを差し出せば、黙って受け取り背
中の装着する。
そしてまたもや流れるような動きでアキを抱き上げた。
今回は左腕に座る形だ。

「あのつわたし、歩けます！」

「駄目だ」

慌ててそう言えば、即座に却下された。
なんだその反応の速さ。
昨日の沈黙は何処へ行った。

「で、でもっ」

「駄目だ」

取り付く島もない、という言葉が思い浮かぶ。

しかしここでめげてはいけない。
こんな羞恥プレイは正氣に戻ったアキには耐えられないものだからだ。

「いやっけど！」

「却下だ」

おいっせめて最後まで言わせろよー！！

即答で断られると地味に刺さるものだと実感する。
図らずも興奮状態に陥り、涙目になりながら抗議した。

「ど、どうしてですか！」

「お前の足ではそう長く歩くことは耐えられまい。
俺が抱えたほうが早い」

「そっすうかもしれないけど、でもじゃあ何処に向かっているんですか！」

「俺の国だ」

「どこー！そもそもあなた誰なんですか！何でこんなことするんですかーーーー！」

てゆーかもっ降ろしてよおおお！！

流れるように続いた会話に釣られるように、言葉が次々と湧き出てくる。

普通に会話しているだけなら、きっと怖気づいて聞けなかった。

興奮状態に陥っていることが幸を奏していたといえる。

「アーノルドだ。

俺は、お前を迎えに来た」

「えっ」

思いがけない台詞に、思考が止まった。

目を見開き、黒い人・曰く、アーノルドの目を見つめる。

迎えに？

どういふこと？

「お前は異世界からこの世界の神によって選ばれ、我が国の王の花嫁として喚ばれた人間だ」

ハナヨメ？

はなよめ？

花嫁？

「ええええええええええ！！」

ない！それはないよ！どういことだよ！

しかも神様に選ばれたとか！

王様の花嫁とか！！

おいしい出てこいや神様てめえこのやろおおおおおお！！！！！！

驚愕のじじょう（後書き）

ちよつとずつ進みます。

あいはんする心と頭（前書き）

宗教批判がしたいわけではないこと、ご了承くださいませ。

あいはんする心と頭

理解出来ないってことが、こんなにも辛いものだったのか、と涙が出そうになった。

「待って下さい、ちょっと待って・・・神様って何ですか。選ばれたってどういうこと・・・」

非現実的すぎて理解できない。

内心の興奮を必死で押し殺し、なんとか自分を保つことに成功する。アーノルドに抱きあげられたままの体勢で、片手で顔を覆いながら問うた。

頭が重くなって、横になりたいという気持ちに潰されそうになる。せつかく頭痛が治まったというのにぶり返させないでほしいと頭の片隅で嘆息した。

「・・・国王家に異世界人の血を入れる為、定期的に繰り返される儀式がある。

選ばれた人間は国内の何処かに現れるが、その場所は神から王へ伝えられる。

神の選定により託宣が行われ、俺は王の命に従い、お前を迎えに来た」

・・・あ、今までで一番長いセリフ。

あんまりな事情に、聞きながらくだらないことを考える。

アーノルドの言葉がひとつも理解できなくて、現実逃避をした。
王様とか神様とか本当に信じられない。

王制国家があるということは理解しても。

百歩譲って、ここが異世界であるということを認めても。

神様が実際に存在して、人の世に介入してるだなんて、信じたくない。

「託宣って、実際王様が神様に会って教えてもらうんですか」

「それは歴代の王のみにしかわからないことだ」

「神様って本当にいるんですか。」

別に宗教とか批判する気ないけど正直信じられません」

「・・・お前の世界ではいなかったのか」

「そういう概念とかはありますけども、実際神様に会ったって言う人なんてほとんどいません。

あまり良く知りませんが、大体は宗教を選ぶ自由があつて、人それぞれ信じるものが違います。

私の生まれた国では、八百万といって、世界のどこにでも神が宿ると信じられていましたし。

それに、現代ではそんな宗教なんてほとんど気にせず生きる人も多いとか。

居ると信じていられる人以外はきつとどうでもいいんじゃないでしょうか」

斯く言うわたしがそうですし、

現実逃避から戻って来れず、遠くの景色を眺めながら答えた。

アキの生まれた家は仏教の檀家だったが、母はアキをカトリックの幼稚園に入れた。

理由は、家から一番近かった為だ。

そのせいか、仏教にもキリスト教にも信奉していない。

神様が居るといふのなら、居たらいいなあとは思ふ。

小さな奇跡が起きたという話は結構好きだ。

しかし、こんな形で人の世に手を加えるのは、正直なしたとも思ふ。

人の世は人で作っていくものだという考えが、アキの根底にある。

「お前の世界では、神というものは精神論でしかないということか」

「んー・まあわたしがあまりそういつたことに興味がないだけでその筋の人にとつては、また違った意味を持つのかも知れませんが、し。

けど、だからわたしにとつては神様というものが身近ではないのです」

そもそも目に見えず実感も出来ないものを容易に信じると言われても、無理です。

「・・・ふむ」

アーノルドはアキの言葉に暫し黙考する。

考えがまとまったのか一つ頷くと、そのまますたと歩き始め、慌ててアキが抗議した。

「ちよつ、人の話聞いてましたか！」

「聞いた」

「だから！行かないったら！そんな得体の知れないもんに誰が従うのっ」

あんたの国には行かないってば――――！！

べしべしとアーノルドの肩を叩く。

屈強の体を持つ大の男に、小さな身であるアキの攻撃が効くはずもなく。

ただ徒にアキの手を痛めるに留まった。
悔しさと戸惑いから、頬が朱に染まる。

「俺ではこれ以上お前を納得させることが出来ない。
国にそれに適任のやつが居るから、会わせよう」

いいよ会わせなくて！
お家帰してええええええ！！

「ここでお前を放置しても、野垂れ死にするのが落ちだろう」

そう言われてはぐうの音も出ない。

1人でサバイバルする知識もスキルもないし、そんな気力もない。
神だかなんだかわからないものに縋る気はないが、それに逆らって死ぬつもりもない。

自尊心も生きたいと思う心には負けるのだ。

「……ううゝ！」

アーノルドの肩に頭をつけ、力なく唸る。
背に腹は代えられない。

しかし、これは行ってもいいものか。
簡単に行ってしまったって、その後どうにもならなくなったらどうしよう。

問答無用で花嫁として王様に献上されてしまえば、無力なアキは逆らうことすら出来なくなる。

「・・・そんなに嫌か？」

「嫌でしょうよ！」

不思議そうなアーノルドの疑問に間髪いれず叫び返す。

花嫁なんかなりたくない。

誰が顔も知らない人に嫁げるのか。

いくら王様であっても、豪華な生活にそこまで興味はないアキにとつては何の旨味もない。

むしろ一夫多妻制であろうことを思えば、妃同士の確執等が想像出来、果てしなく面倒だった。

思わず駄々っ子のように喚いてしまつのも無理はないと思いたい。

「やだやだやだっ花嫁なんてやだああああ！」

「王族に嫁ぐのは名誉なことだろう」

「そんなくっだらない理由で簡単に嫁げる程性格破綻してないー！」

「王は人格者だ。悪いようにはしないだろう。」

それに、贅沢出来るぞ」

「そんなもん慰めになるかあああああああ」

わたしはわたしの身の丈に合ったもんがいいんだよー！

ついにうわああんと泣き出してしまったアキの頭を、アーノルドがよよしと撫でる。

その青い眼に顔を真っ赤にしながら泣き喚くアキを映しつつも、彼の足は淀みなく国元へと進んでいた。

アキの抵抗などなんのそのだ。

アキは、泣き喚く頭の冷静な部分で、アーノルドに身を任せるしかない自身の現状を理解していた。

こうなってしまうては、なるようにしかならない。

現状を覆せるような力もない。

まずは、王とやらに会ってみればいい。

考えるのはそれからだ。

頭の中では冷静に考えられる自分が居るのに、どうしても現実を認めたくない幼い自分が居ることもまた、アキは知っていた。

その後、またもや泣き止むきっかけを見つけられなかったアキは、

力尽きるまで泣き続けると、不本意ながらもアーノルドの腕の中で眠りに落ちたのだった。

閑話 その時の黒い人2

幼い少女の泣く様は、どうしてか酷く胸が痛むような気がした。

「もっお家帰るっっっっっ」

うえええんと盛大に喚きながら、片腕で抱き上げた少女は飽くこともなく泣いていた。

昨日から良く泣くな、などと思いながらも、好きなようにさせてやる。

少女の心を思えば、泣くなというのは酷であろうことがわかっていたからだ。

ある日突然、強制的に異世界に連れてこられたあげく、勝手に未来の夫まで決められてしまったのだから。

おまけにアキは神の存在に対しても非常に懐疑的だった。

自身にとっては当たり前前の存在が、アキにしてみれば居るか居ないかすら不明なものだったという。

アーノルドには神の定義を説くことも、アキを納得させてやること

も出来ない自分の口下手さを重々理解していた。

故に、早々に国元へ帰り付き、説明出来る人間に引き合わせようと考えていた。

しかし、気が急くのはそればかりが理由ではない。

アキはこの先元の世界には帰れないし、神の選定を覆すことも出来ない。

それをアキに伝えるつもりは毛頭ないが、彼女がそのことに気付いたとき、側に誰か頼りになる人間が居る必要があると思ったからだ。

「ひつく・・・うつく、うえ・・・ふぐ」

ぐずぐずと鼻を鳴らしながら、気付けばアキはアーノルドの肩に頭を凭れさせ、眠り込んでいた。

あれだけ泣いていれば、疲れるのは当前だ。

アーノルドは、ほとんど無意識にアキの柔らかい髪を撫でながら、ふと思ったことがあった。

アキとアーノルドが問題なく意思疎通が出来ているのは、実は神のおかげと知ったら、彼女はと思うのだろうか。

異世界から来る花嫁たちは、大体こちらと使う言語が違うことが多い。

そのままでは出会った最初から大変な苦勞を強いられしまうこともあり、いくつか神の加護がついているのだ。

曰く、言葉を話す・聞く・読むことに支障がない（書き文字は何故か練習が必要となる）

曰く、こちらの世界の者からは好かれやすい（嫌われることはほばない）

曰く、子どもは能力の高い者が生まれやすい（王族自体に天才が多い家系ではある）

・・・等々、特別な異能があるわけではないが、小さいが地味な加護があるらしい。

もともと神の選定とは名ばかりで、この世界の唯一神が別世界で氣に行った人間を近くに置きたくて、自分の管轄する世界の人間と娶せようとしたのが始まりだといわれている。

そのせいか、花嫁たちは総じて神の愛し子とも呼ばれる。

巻き込まれた娘たちは哀れだが、それに逆らう術は今の所なく神の意向に従うしかないのも、所以の一つである。

ちらり、泣き疲れて寝てしまった少女の顔を眺める。

見た目に反して、アキはこちらが驚くほど大人びた口調で話す。考え方も10歳に満たない幼子のものではないように思った。

そうかと思えば、駄々っ子のように泣く様は年相応だ。

一体、彼女は何者なのだろう。

そんな思いがちらりと頭を過ぎる。

アキを見ていると、何故か庇護欲を掻き立てられる己が居ること知った。

たった2日。

側に居た時間は、まだまだ短いものだ。

なのに、己はいつの間にか彼女に触れることを躊躇しないようになっていた。

そんな自身に酷く驚くが、何故か納得もしていた。

アキを守りたい。

彼女を幸せにしたい。

会ったばかりの少女に対して思うことではないが、アーノルドは既に自分の気持ちを決めていた。

これも神の加護の内なのだろうか。

こんな気持ちは生まれて初めて感じるものだ。

王に対して忠誠を誓っている己が、他に守りたい者を見つけるなど。

アーノルドは腕の中ですよやすや眠る不思議な少女を抱き直すと、その眼の端から零れた涙を優しく拭いた。

眠りのだいしょう

眼が覚めたら、既に逃げられない状況に陥っていました。

「・・・・・・・・んん」

ふやふやと寝言を呟きながら、思う様すりすり枕へ顔を擦り付け、惰眠を貪る。

ああ気持ちいいなどと覚醒半分の頭で思いながら、暫しそのままの状態を享受する。

しかし、胸の中から湧き上がる、何かおかしいと感じる気持ちに揺り動かされ、渋々眼を開けた。

「・・・・・・・・あれ・・・・？」

ばさばさの頭をゆりりと巡らせ、辺りを見回し、緩慢に瞬きを繰り返す。

・・・ここは一体どこでせう。

「ベッド・・・」

ふかふかと柔らかかなベッドに寝かされていたらしい。

アキの身にはとても大きな、クイーンサイズはありそうなベッドだ。ちなみに先程まで縋っていた枕も申し分ない柔らかさだった。

無意識に手触りの良いシーツを撫でながら、尚も辺りを観察する。

ベッドの周りをカーテンのようなものが覆っていることを見て、天蓋付きなのかと思い至る。

しかしどうやってここまで来たのかがさっぱりわからない。

アキは再び枕に凭れながら、胸中で首を傾げていると、扉が開くような音がして少し身構えた。

「起きたか」

ぱさりとカーテンを避けながら、現れた人を見上げる。

黒いかつちりとした襟付きの服はさながら軍服のようだ。

肩や胸に飾りを厭らしくなくつけマントを後ろに払ったその人は、誰あろうアーノルドだった。

「・・・アーノルド、さん・・・ここはどこですか？」

ぼんやりしたまま問いかける。

脳内ではだんだん覚醒してきたせいか、冷静な自分が嫌な予感を訴

えている。

しかし認められない。

誰かの口から聞くまではその主張は受け付けないとばかりに頑なな自分が叫んでいる。

「ここはエディナール・・・俺の国だ」

やっぱり・・・。

外れてくれたらよかったのにと心の底から思う。

アキはその言葉を聞いて、思わず遠くを見やる眼になった。

「アーノルド、花嫁様はお目覚めですか？」

「・・・ファリス」

アキの眼が遠くなっている間に、第三者の声が割りいつてきた。
穏やかなテノールの声が、耳に心地良い。

アーノルドが顔を向けた先には、優しい男の人が居た。

さらさらの栗色の髪を肩あたりで揃えてあり、少し垂れ気味の碧の

眼が柔和な印象を与えている。

アーノルドに比べゆつたりとした白い衣服を着ていて、アキにはまるで神官のように見えた。

白い肌のファリスに比べ、アーノルドが若干浅黒い色をしていることに気付いて、2人を見比べる。

改めて見て、2人とも綺麗な顔している、なんてとりとめのないことを思う。

ファリスと呼ばれた男はアキの側まで来ると、穏やかな笑顔を浮かべた。

「初めまして、花嫁様。

ファリス・ベルウッドと申します。

お加減は如何でしょうか？」

「えっと・・・初めまして、アキと申します。

・・・あの、花嫁って呼ぶのは、」

「ああ、では、アキ様とお呼びしても？」

につこり、綺麗に微笑まれる。

気品溢れるというのは彼のような者をさすのだろう。

言葉を遮られたことすらどうでも良く思ってしまう。

アキは気圧されたように顎を引いて、こつくりと頷いた。様付けも本当ならやめて頂きたい。

しかし、その一言が、言えなかった。

何だかファリスには妙な迫力があるように思え、怖気づいたのだ。・・・というか、わざと断らせないようにしている？

「・・・身体の方は、充分寝かせて頂いたので、大丈夫です」

「それは何より。」

私はこの国で神官長を務めさせていただいております。

同時に、王よりあなたを導く教師の役目を仰せ遣いました。

アーノルドは必要最低限のことしかお伝えしていないようですので、私の方からご説明させていただきます」

ですが、その前にお食事に致しましょう。

そう言われて初めて、こちらに来てから何も口にしていないことに気付いた。

それなのに、喉が酷く乾いた覚えも、空腹を訴える腹の虫の声を聞いた覚えもない。

あれだけ泣いたのに水分を摂らなくても大丈夫だったというのは、なんだか信じられない思いだった。

しかしそう思いはすれど、空腹を感じていない為食事をする気にはなれない。

「えと・・・」

「空腹や喉の渴きを感じないのは、アキ様のお身体がまだこの世界に馴染んでいないせいです。」

しかし生きていく上で食事は必要不可欠ですから、今日こそ召し上がっていただかねば」

にっつ。

・・・今日こそ、ってなに？

アキは内心で慄きながらもおとなしく従うことにした。

怯えながら頷いたアキに、ファリスから起きられるかの確認をとられ、再度頷く。

こちらへどうぞと言いながら、ファリスがカーテンの内側から姿を消した。

それに続いてベッドから降りようとアキが動くと、ひょいとばかりにアーノルドに抱きかかえられた。

「・・・あの、」

何しやがるんですか・・・。

無言で批難の眼差しを向けてみるも、悉く無視されてしまった。

何を思ってこんなことをしているのかさっぱりわからないが、こちらの意見は聞いてくれないようだ。

彼は実はロリコンなのだろうかなどと思いながらアキは早々に抵抗を諦め、アーノルドに身を任せる。

本音を言えば、外見は幼女でも高校生の中身なので、羞恥心が非常に刺激されるわけなのだが。

ベッドを抜け出した先には4人掛けのテーブルと椅子があり、そのうちの一番手近なところにファリスが立っていた。

ファリスはアーノルドがアキを抱き上げているのを見やると瞠目し、ぱちくりとひとつ瞬きをした。

「・・・・・・・・・・アーノルド？」

「・・・・・・・・・・あの、えと、」

「・・・・・・・・・・」

居た堪れない空気にアキが身動きをするも、アーノルドだけが意に介していないようだった。

ファリスが無言でじとりとアーノルドを見つめるも、一向に反応を返さない為、結局は苦笑するだけに留まった。

アキとしてはこの状態に歯止めを掛けてくれるのではないかと内心期待していたものだから、その失望も大きい。

こんな羞恥プレイ、誰が喜ぶ。

アーノルドはアキを一つの椅子に座らせると、ファリスとは反対側に移動し、アキに寄り添うように立った。

「・・・・・・・・・・いただきます」

アキは諦めたように溜息を吐くと、両手を合わせて小さな声で呟いた。

それから大人しく食事を始める。

食欲はないが、出されたものは素朴でありながら食材の味が生きていて、とても美味しかった。

いかんの意（前書き）

中途半端に途切れていたので、3行程追記しました。
申し訳ありません（8 / 10）

いかんの意

白いやわらかな丸パンに、サラダと温かいきのこのとろっとしたスープ。

それらをゆつくりと時間をかけながら咀嚼して、胃に入れる。

お腹は空いていなかったが、あまり胃に負担にならない量だったのが幸이었다。

味付け自体は塩だけのシンプルなものだったが、出汁の旨味が出ていて思わずおかわりしたくなった。

全てを平らげたあと出されたお茶を飲みながら、ほづ、と溜息を吐く。

「胃の調子はおかしくないですか？」

「?いいえ、美味しかったです、ごちそうさまでした」

それらの一部始終を黙って見守っていたファリスが声をかける。

アキは不思議そうにファリスを見やったあと、ぺこりと頭を下げた。

それを見たファリスが、ほっとしたように笑う。

その反応に、尚もアキが不思議そうに首を傾げると、苦笑して疑問に答えてくれた。

「アキ様はこちらについてから、3日間眠り続けておられたのですよ」

どうやら大丈夫そうで安心致しました。

「へっ」

今なんと。

アキが驚いて固まると、ファリスは困った顔で微笑みながら、アーノルドをちらりと見た。

その見られたアーノルドは我関せずといった表情を崩さなかったが、ファリスが尚も強請るとアキのほうへと視線を寄こして、重い口を開いた。

「・・・お前が眠ってから1日程でここへ着いた。

それでも眼を覚まさなかったのでベッドへ寝かせたのだが、呼びかけても起きなかった」

「はぁ・・・」

つまり、移動時を含めると実際は4日ばかり眠り続けていたらしい。起きたときに倦怠感も身体の不調も見受けられなかったので、アキにとつては寝耳に水だ。

来た早々に心配をかけてしまったようで、申し訳なくなる。

「あの、すみませんでした」

ぺこりと頭を下げる。

迷惑をかけてしまったときは、ごめんなさいだ。

いくら理不尽な状況に不満があろうとも、彼らに対して迷惑をかけたことに変わりはない。

その辺は、アキは潔いところがあった。

「いえ、アキ様が謝るようなことはございません。
突然の異世界渡りに、状況が状況ですから、心労が溜まっていた
のでしょうか。」

それに先程も申し上げましたが、アキ様の体は今ゆっくりこちら
に順応しようとしているのです。

幼い身故、その分眠りを必要としていたのでしょうか」

幼い・・・うん。

ファリースの言葉は染入るようにアキの中へはいつてきたが、最後
の一言にちよっと思考が固まった。

本当は高校2年生なんです。

もう17歳になってるんです。

今何故か7歳くらいにしか見えませんが、もう3年もすれば成人だ
ったんです。

ああんもつどう表わしたらいいのこのもどかしさ！

につこり微笑まれて、アキはひきつりながら笑顔を返した。

本当のことを言ったところで信じてもらえるのかわからない。

本人であるアキですら、信じ難いくらいなのに。

内心で葛藤するアキを前に、ファリースがにこやかに告げた。

「さて、それではアキ様は少しお休み下さい。
また後程参りますから、ご説明はその時に致します」

「あ、はい」

慌ててアキが頷くのを確認して、今度はアーノルドへ向き直る。
直立不動の黒い人の名を確認するように一度呼んだ。

「アーノルド？」

「ここに居る」

「わかりました」

「えっ」

しょうがないですね、と何故か嬉しそう呟き、ファリースは止める
間もなく部屋を出て行ってしまった。

わかりましたじゃないでしょおおお！

アキはそれを為す術もなく見送るも、胸中でファリースを詰るのを
忘れない。

何故ここに黒い人を残す。

何もすることはないでしょーよ！

ちらり、アキがアーノルドを見上げると、アーノルドもアキを見下
ろしてきた。

「えつとー……」

沈黙が痛い。

アキは途方に暮れ、困った顔でアーノルドを見上げることしかできなかった。

優しいくつき

「・・・・・・・・・・えーと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

部屋を満たす静寂が重い。

椅子に腰掛けたまま、ファリスを為す術なく見送った後。

アキはこの状況をどう打開しようかと、困惑でいつぱいの頭をどうにか働かせようとしていた。

黙したまま傍らに立ち尽くすアーノルドは、何の反応も見せてはくれない。

それはいい、もう慣れた。
だがかし。

沈黙でも気にせずに居られるほど、馴染んだわけではないんですが・
・？

内心で悲鳴を上げながら、無意識に感じてしまう重圧に耐える。
アキ自身、饒舌な性質ではないことを認識している。

それほど社交的ではない、むしろ人見知りするほうであることも。
おまけに、それに輪をかけるように、アーノルドは無口・無表情・

無反応なのだ。

この状況を変えたくば、アキがなんとかするしかない。

それがわかっていてもどうすればいいのか、良い考えは思いつきそうになかった。

「・・・んしょ、」

どうしようもなくなり、ひとまずベッドに戻るべく椅子から降りることにした。

大人用なのであろう椅子は、アキには大きく、座った状態では足が床に付かないくらいの高さだった。

それでもずりずりと体を少しずつ移動させれば、なんとか降りることに成功した。

とん、と足が床に着いた、と思った次の瞬間。

「っつきゃー！」

ふっと影が差したことに気づく間もなく、アキの体は椅子の高さを遥かに超えていた。

慌てて自分の体を支えている黒い腕にしがみつく。

アーノルドがアキを抱き上げたのだった。

「ちょー！何するんですかつ」

あわあわと縋りついたアキを一瞥し、アーノルドはしがみ付きやすい様にか、自身の首へと誘導する。

アキは抵抗するでもなく、むしろ自然に目の前の首元へ縋りつく、アーノルドを見上げた。

一体何をしたいのかさっぱりわからなくて困惑する。

困ったように見上げてくるアキを黙って見下ろすアーノルドは、相変わらず何も言わない。

何もしないし、表情を変えることもない。

・・・何考えてんだかさっぱりわかんない。

アキは暫し答えを求めてアーノルドを見つめたが、諦めて嘆息した。深く考えたほうが負けなような気がしたのだ。

こういうときは、諦めてしまうに限る。

こてんとアーノルドの肩に頭を預け力を抜くと、為すがままになる。諦めるのは得意なのだ。

褒められたことではないけれど。

「・・・疲れたか」

「・・・？いえ、」

ぼつり、頭上から降ってきた声に、内心で首を傾げながら返答する。質問の意図がわからない。

随分長く寝ていたから、疲労などは取れている。

寝すぎで体力が減っていることを危惧しているのだろうか。

食事をするだけで疲れてしまうほど、アキは柔ではないのだが。

よく分からないけれど、彼がアキを気遣っている様子なのだけはおかった。

寝込んでしまったことが余程心配をかけてしまったのだらうと思う。返事だけでなく、アキはふるふると首を振って、否定の意を示した。正直なところ先ほど感じていた心労はあるがこの際無視することにする。

体だけで言えば本当に問題はないのだから、これ以上無意味に心配かけることもない。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「いや・・・」

ダメ押しとばかりに、にこつと笑ってみせる。

アーノルドはこくつと小さく首肯すると、ベッドへと向かい、アキをその上に降ろした。

いつまたファリースがこちらに来るのかはわからないが、とりあえず休めということなのだろう。

内心でちよつと過保護かなと苦笑しながら、大人しくベッドに潜り込んだ。

位置を探るように、もそりと一度シーツの中を潜ったあと、ひょこりと顔を出す。

枕に頭を落ち着けて傍らにいるアーノルドを見上げると、傍らに小さな椅子を持ってきて、そこに座った。

どうやらそこに居座るらしい彼を尚も見上げ続けると、大きな手で頭をゆつくり撫でられた。

暖かい大きな手が気持ちよくて、猫のように目を細める。

このまま撫でていてくれたら、きつと気持ちよく寝られるだろう。

そう思ったアキが乞うようにアーノルドを見上げると、こくりと頷かれる。

何も言われずとも、ここにいて、といわれた気がした。

「ありがとうございます」

もう一度、小さくお礼を言う。

安心感を与えてくれるのは間違いないこの人であることを知っていたから、その言葉はすんなりと出てきた。

アーノルドは無表情でじつとアキを見つめたままだったが、それすらも最早気にならなかった。

やがて間もなく寝入ったアキの頭を優しく撫でながら、アーノルドはずっとベッドから離れることはなかった。

ひとときの悪戯

目が覚めてすぐ、あまりにも驚愕して、言葉を失った。

「――！！？」

ふっと浮き上がるように意識が戻り、緩慢に瞬きをして、後。くり、と首を横に倒してみても、すぐ目の前にあったのはアーノルドの顔だった。

目を閉じて、眠っている・・・そう、寝顔が目の前に。

いや、それはいい。

別に気にしない。

しかし。

ちちち、ちかいんですけどー！！！！

あんまり吃驚したものだから一瞬息をするのを忘れてしまったほど。顔と顔の間があまりにも狭い。

わずかに15センチほどしかないその隙間を認識して、脂汗が噴出した。

待て待て待て。

どうした、何があった、誰か説明して。

固まった体勢のまま、内心で叫ぶ。

混乱する頭を必至で抑えながら、アキは無意識に体に力を入れた。パニックに襲われながらも、必至で、一番近い記憶を探り出す。確か、食事をした後、ベッドに入って休んだのだった。

アーノルドがベッドの傍の椅子に座って、頭を撫でてくれていたのを覚えている。

それで、それで――それで？

それがどうしてこうなりますか。

わかるかーい！！

「・・・」

「・・・っ」

アーノルドが僅かに身動きして、思わず体が震えた。わわわわ、これ起こしていいの？

むしろ起こさないでわたしが逃げるべきなの？

どうなのー！ー！？

「あ、アーノルド、さん」

ときどきと煩く鳴る心臓を抑えながら、震える声で呼びかける。起きてえええ心臓に負担がかかるっうっう！！

「アーノルドさん、起きてください」

声をかけながら、震える手を伸ばして、アーノルドの顔に触れる。

ぴたぴたと頬を軽く叩いても、眉間に皺をよせこそすれ、起きる気配がない。

「起きて。起きてくださいー」

だんだん心臓の動きも落ち着いてきて、なんだか余裕が出てきた。もはや何しても起きないような気までしてきてしまう。

ちよつとだけいたずら心が沸いて、無意識ににまっと笑った。

「起きてえー起きないとこーんなことしちゃうぞーお」

むにっ

両手を伸ばして、アーノルドの頬を掴み、軽く引つ張った。

思ったよりも柔らかく、しかもすごく伸びるので、思わず限界突破まで挑戦したくなる己を止めることに必死になる。

さすがにそれをしたらだめだ。

それだけはやめておこうよ自分。

「くつくつく・・・ちょ、うける・・・」

声を押し殺しながら、滲み出る笑いを堪える。

端正な顔なのに、頬はみょーんと伸ばされているその滑稽さ。腹筋が危険です。

「ぶふっ・・・ぶくくく、やばい、これいじょうはやばい・・・ひい」

ゆっくり手を放すと、アーノルドの両頬を軽く摩りながら、こみ上げる笑いと戦った。

耐えられない、しかしここは耐えるのだ、アキ！しっかりしろ！
すりすり、と触れる肌を優しく撫でる。

寝ている大の男の頬を撫でながら、忍び笑う少女の図。
怪しい。

この上なく怪しい。

「……………目が覚めたか」

「ひいっ！！！！」

どつきーん！

ぱちつと擬音がつきそうなほどあつさり目を開けたアーノルドに見
つめられ、思わず奇声をあげた。

起きてたのかよ！卑怯すぎるわ！！

「おおお、起きてたならゆってくださいよおおお！！」

思わず涙目になって、アーノルドを非難する。

うわぁあん、怖かったよ！

すげー怖かったよー！！！！

アキが思わず大声をあげてアーノルドを詰れば、無表情なまま頭を
撫でられた。

ええい、それでご機嫌とりになるかー！

憤然としていると、むくり、起き上ったアーノルドがベッドから降
りた。

未だ寝ころんだまま心臓のあたりで手を握っているアキを見下ろす
と、黙って抱き上げ、腕に座らせた。

そういう体勢だと、自然アキの目線のほうがアーノルドより高くなる為、見下ろす形になる。

「・・・すまん」

アキの目をまつすぐに見上げ、ぽつり、こぼされた謝罪に、居た堪れない思いが沸く。

本当は、謝るのなら、こちらのほうなのだ。

休息を摂らなきゃいけなくなったのも、寝ていたアーノルドに手を出したのも、実際問題、アキが悪い。

「いや、あの・・・こちらこそ、いたずらしてごめんなさい」

「・・・いや、元気になったのなら、いい」

ぺこり、小さく頭を下げながら謝れば、赦しの言葉が返ってくる。

いいのか、あれはいいのか、アーノルドさん。

幼女だからってそう簡単に許したらだめだと思っただがどうか。

しかし赦して下さったのだから良しとしておこう。

その優しさに良心を刺激されつつも、アキはこっくり頷くに止めた。

「・・・ファリスが、おまえが起きたら、部屋へ来ると言っていた」

「あ、はい、わかりました」

アキを抱き上げたままアーノルドが本題に入った。

そもそもアーノルドは、元はそれを伝える為に傍に居たんだろう。

何がどうなってああったのかわからないが、とりあえず休息は十分に摂った。

フアリスが来るというのなら、ここで大人しく従ったほうが良いのだろう。

一度頷いて受諾すると、アーノルドはアキを椅子に腰かけさせ、フアリスを呼びに行った。

その後ろ姿を見送りながら、なんだか過保護っぷりがあがってやしないか、と思ってしまうアキだった。

神様とはらぐる

戻ってきたアーノルドとファリスとアキの話し合いの場は、結論から言えば、ほとんど進まなかった。

その原因は八割アキで、残り二割はファリスのせいだと思う。

「——で、もう一回お聞きしてもいいですか？」

「ええ、何度でもどうぞ」

「わたしが王様の花嫁？」

「はい、と言っても、別に相手が王でなくとも良いですよ」

「それをやめることは出来なくて？」

「いえ、一応意思決定は花嫁の自由ですよ、相手選別に対してだけです」

「元の世界には戻してもらえない？」

「まあそこは我らには如何ともし難いのが現状です」

「………ちょ、も、もいつかい……ちょっとほんと嘘はなしでお願いしたいのですがっ」

「嘘など申しておりませんが、アキ様にご満足頂けるまでお付き合
い致しますよ?」

ご存分にどうぞ?

にっこり。

「・・・う、うわああんっ何度聞いたところで満足するわけないでし
ようがああああ!!」

ばっかやるーーーーー!!

延々と繰り返された何十回めの問答は、遂にアキの堪忍袋の緒がぶ
ち切れたことによって終わりを告げた。

ファリスに向かって半泣きになりながら暴言を吐き、足が満足に
床に触れない椅子から飛び降りる。

そのまま扉に向かって走り出そうとしたところで、横から腹を掬う
ように持ち上げられた。

「ファリス、あまり苛めるな」

「人聞きの悪いことを言わないでください、アーノルド」

えぐえぐと泣くアキを腕に抱え上げながら、アーノルドがファリ
スを窘める。

にっこり笑顔を崩さずそれに返答したファリスには外道の称号を
与えたい。

思わずひしつとアーノルドの胸板にしがみ付いたアキは、そのまま顔を押し付けた。

何度も何度も繰り返して教えてもらっても、納得出来るわけがない。誰が花嫁で、ここがどこだっていうんだ。

そんなアホな話、認められるはずがないし認めない！

苦笑したファリスが、ふるふると頭を振って拒否を示し続けるアキを見ながら、穏やかに語りだす。

「ここは王国エディナール、神が最初に作った人間が建国しました。国は他にもいくつかありますが、その全てが信仰しているのは唯一神アリアロスです。

彼はこの世界を創造した原初の神であり、万物の父です。世界を創り、植物や動物を造り、最後に人を作りました。

彼は己の手掛けたものを遍く慈しみました。特に人に対しては、その愛故にちよつと暴走するところがあるといいますが」

「・・・へ？」

「溺愛するといつか偏愛するといつか」

「え？」

「・・・まあなんとというか、人が大好きな神なんです」

「・・・はあ」

話を聞きながら、内心では、だからなんなのとしか思えない。

なんか一瞬不穏な言葉が聞こえたような気もしたが、結局人が好きな神様なら別に良いのではないのか。

被造物を慈しむ創造神、ないことはない。

そもそも、嫌われるよりよっぽどましだろう。きっと。たぶん。
頭をアーノルドに凭れさせたまま、気のない返事しかないアキに、
ファリースが苦笑を濃くする。

「それだけならまだしも、悪いことに、その愛の方向がこちらの世界だけに留まらないのですよね」

「あ、なんか聞きたくない」

これ以上聞いたらなんかやばい気がする！

直感から、アキはさつと両耳を塞ぎ、顔面をアーノルドの胸板へ押し付けた。

いつの間にか乗せられていた膝の上にちんまりと縮こまって、ふるふると震える。

聞きたくない聞きたくないと小さな声で呟く様は、まるで生まれたての子羊のようで。

「はい、残念ですが、聞いてください」

「やだやだやだああ！！！！」

まじむりほんと怖い手え放してーーーー！！

容赦なくも実力行使に出たファリースが、ぐいー、とアキの手を掴み、耳から引き剥がす。

嫌がつている幼子に無体な真似はやめなさいよこの鬼畜神官があ！
にこやかに笑ったままなのに、その笑みがひたすら恐ろしい。

必死で塞ごうと抵抗するアキの努力も虚しく、ファリースは問答無用で言葉を紡いだ。

「通常、神はこちらの世界に留まっているわけではなく、気ままにふらふらしているらしいのですが。」

問題は、他の世界を覗いたときに自分好みの人間が居ると、勝手に連れて帰ってしまうのですよ。

連れ去られた人間は、こちらの世界で居場所を与えられ、以後元の世界に戻ることは叶いません。

連れてこられた人間を元の世界へ返還して差し上げる力を持つ人は今も昔も居りませんし、例え出来たとしても神が許さないでしょうね。

困ったことに、慈愛神としての面もありますが、気に入ったものに対しては執着心も激しくて。

そう、万に一つ、神が滅びることのない限り……つまり、死ぬまで戻ることは叶いませんねえ」

「いやあああああー!!」

それ誘拐して拉致監禁ってことなんじゃないでしょうか！犯罪！

っーかなんかいきなりホラーになった！

遂に恐慌状態に陥ったアキが泣き叫ぶと、アーノルドが苦しめない程度に抱き締めてきた。

青ざめてガタガタと震えるアキを腕の中で宥めつつ、呆れたようにフアリースを睨む。

「……やりすぎだ」

「おや、そうですか？」

しかし現実には厳しいものですから。

嫌でも知っていて頂かねばならないことですし。

まあ嗜虐心を刺激されるということは否定致しませんが」

「鬼畜ドSは滅びろばか——！！」

一見柔和なにつこり笑顔がデフォルトなのに、鬼畜発言を繰り返す
ファリスは、この日よりアキの天敵となった。

神様とはらぐる（後書き）

アキの幼児退行ぶりが激しい。

しかしギャグを目指したわけではなかったのにどうしてこうなった。

しょあくの根源

泣き叫んで、しばらく後。

「・・・そもそも、事の起こりはいつからですか？

何でわざわざ他所様のとこの人間搔つ攫ってきてしかもそれを王様の花嫁に、なんてことなっちゃったんですか。」

ぐったり、アーノルドに凭れつつファリスへと問いかけた。

アーノルドが緩く腕で囲ってくれているおかげで安心感はんばない。しかし泣いたおかげで気力も体力ごっそり持つて行かれましたよ。どうしてくれるこの腹黒鬼畜ドS。

「現在に至るまで、世界が出来て800有余年、初代が建国して500年が経っています。

神は世界を創世して後、自分の為したことに満足し、一旦この世界を離れました。

その間、何処で何をしていたのかは定かではありません。

しかししばらく時間を置いて帰ってきた神は、異様に人間に固執するようになっていたとか。

おまけに他の世界でお気に入りを見つけ一緒に連れてきちゃったらしいのです」

「・・・いやいやいや」

それ誘拐つていうんだよ悪いことなんだよ。

誰か神様に教えただげ。

あとなんかだんだんファリースの口調が崩れてきてる気がする。連れてきちゃったって。

神官長しっかりして。

「お気に入りとは言え相手は人の子。

側に置いておきたくても、神の側で生きるには弱く、儂いものです。

神はその事実には悲しみましたが、それでもその人間を愛しておられた。

幸せになつてほしいと考え、考慮に考慮を重ねた末、この国に目を付けたのです」

「・・・どうして？」

「ここは神の作った始まりの人間が興した国。

それ故、もともと思入れも深かったのでしょうね。

お気に入り同士、そこに生きる人間と異世界の人間をくっつけてしまえば良いと」

そうすれば皆幸せってか。

いやいや、ないですよ！

「ちよい。まで。なんで神様なのにそんな短絡思考なの！」

「まあそういう神様なんですよ。

子ども心が未だにありますか」

「神様迷惑極まりない！ていうかそれが最初の出来ごと！？
それで何回も繰り返してるとかもーなに！なんなのっ」

こども心なんて捨ててしまえ！

思わず頭を抱えてしまった。

異世界の人間連れてきちゃった後に困って自分とこの王様にそれを押しつける神様で。

仮に、当時の王様が未婚な人だったならいいかもしれないが。

いやだめだけど。

既婚よりましてただけだ。

「・・・始まりの花嫁を娶った王様は、まだ奥さんいなかったの？」

「いえ、正妃は既におりましたし、子どもも2人いらしたそうですよ」

つい気になって問うてしまった自分を勢いつけて殴り飛ばしたい。
いるじゃん！

しかも子持じゃん！

つつーか、

「一夫多妻制なのここ！」

「子を残すのは王の仕事の内です。

妾妃を娶らず正妃だけを傍に置いた王も中には居りますが。

それ以外のどの時代も、後宮には大体3人から4人はいらっしやいますよ」

「悪夢だ・・・」

そんなとこなのに、わざわざ花嫁をぶっこんだわけですか。
酷すぎる。

「花嫁は、嫌がらなかったの？」

「そうですね、まあ半々だったと言われておりますよ。

突然何も知らずに連れてこられた方と、事情を全て知っていた方の二通りだったとか。

しかし、今までの花嫁たちは皆、最終的に折れて大人しく王へ嫁いだそうです。

まあ基本的に花嫁たちは皆から大事にされますし、妃同士の確執も無縁ですから。

そこさえ目を瞑れば、幸せにはなれるでしょう」

「・・・どゆこと？」

正妃と妾妃が居るような世界では、王の寵愛を巡って泥沼の争いがあるのは当たり前だと思っていた。

そもそも、愛する人を誰かと共有出来るような懐の深い人間など稀と言っている。

皆、独占欲というものを持っているものなのだから。

そんな私は一夫多妻制とか我慢出来ない性質です。

心狭いと言われたって良さ。ふんだ。

「花嫁たちは神の加護のもと、この世界の人間にはほとんど嫌われないようになっていそうです」

「・・・・・・加護・・・」

「連れて来られてからは、様々な加護が地味についているのですよ。それ故か、花嫁たちは時に神の愛娘と呼ばれます」

そのまんまです。

世界最強の親ばかがついてるから嫌われないってすごいね。
でも地味とか。

おい神官。

「……………んで、キツカケはわかりました。
なんでそれが常習化しちゃってるんですか」

はい、次の質問。

大事よねここ。

「神はこの国に花嫁が受け入れられることを殊のほか喜びました。
歴代の王達も、神の加護付きの娘を王家に取り入れた方が益が多いと考えた。

双方の利害が一致したわけですね」

……………。

「……………つまり？」

ああ、この先を聞きたくない。

これの予想が当たってたら、わたしは憤死出来る気がする。

「ええ、つまり、まあぶっちゃけますと、調子に乗っちゃったわけ
です」

「碎け過ぎです！

口調くらい一貫させる！」

いらっと来てうつかりどうでも良い突っ込みをしてしまった。

そんなことどうでもいいのに。
そうじゃない、大事なものは、

「調子に乗っちゃって？」

神様は異世界から人間を誘拐をすることを止めず？

王族が黙ってそれを受け入れ続けた結果？

・・・それが慣例化しちゃったって、こと？ねえ、そゆこと？」

思わず、地を這うような低い声が出た。

いつの間にか俯いてしまった顔を上げられないまま、手を強く握る。
落ち着けわたし。

ここで怒ってもどうしようもない。
しっかりしろ。

「まあ、言ってしまえばそういうことですねえ」

残念でなりませんよ、ええ全く。

あえて空気を読まないにこやかな声が頭上から降ってくる。
ぶちり、頭のどこかで紐が切れるような音が聞こえた気がした。

閑話 その時の黒い人3

ベッドの中で小さく丸まって眠るアキを眺めながら、先程までの騒動を思い出し、嘆息する。

今は泣き疲れて眠ってしまったこの小さな少女は、つい数分前まで大爆発を起こしていたのだ。

人選を、誤ったのだろうか・・・。

さらりと零れる柔らかな頭髪を撫でながら、そんなことを思う。

突然こちらの世界に放り込まれた少女。

彼女のこれからを思えば、事情に詳しく社交性も高いファリスに任せるのが一番だと思っていた。

むしろ神の代理人とも言われる神官長としては、これほど適任な者も居ないはずだった。

それが。

『ふざけんな！少しは申し訳なさそうにしろっつーのよ！！ファリスのばか！！』

激昂して、泣き叫ぶ少女はしばらく癇癢を起したまま、治まらなかつた。

ファリスがそれを見ると、こちらへ目線だけ寄こし黙って退室してしまっただのは、まあ仕方ないでしょう。

怒らせた元凶をそのままそこに居させても、どうしようもないだけだ。

謝罪をするにしろ、今はその時ではない。

・・・それにしても、頭が痛い。

ファリスは、アキをわざと煽り、怒らせたのだ。
あえて怒らせるような態度と言葉を選んでいたのは途中から気が付いていた。

どれだけ真摯に説明しようと、結局花嫁たちが理不尽な理由で喚ばれたことには変わりがない。

心優しいものであれば、こちらが必死になればなるほど、怒りと共に罪悪感を覚えるだろう。

こちらが『いい人』であろうとすれば、それが花嫁を追い詰めることもあるのだ。

実際、そうしたことて潰れかけた花嫁も居ると聞く。

その時は周りがかどうにか浮上させたらしいが、そういったことがあったのは今は伏せられている。

ファリスは神官長として、闇に葬られていった事実を知識として受け継いでいる。

ましてアキは、今までの花嫁達が十代後半から二十代だったのに対し、歴代最年少とも言つべき幼い少女だ。

余計に、そうなる事態を避けたかったのだろう。

きっと俺以外はほとんど知らないが、ファリスは、実はこどもが好きなのだ。

「・・・まったく、不器用な」

普段社交的で口が上手いとされる幼馴染の、己に劣らぬ不器用さに、溜息が零れる。

自分が嫌われても、ファリスはアキの負担を軽くしたかったのだろう。

それが分かっているのに、自分が彼らの間を取り持つのは難しいことを知っていた。

気も利かず、口下手な己が、なんと口惜しいことか。

ころりと寝がえりを打つアキを見下ろしながら、ぼつり、呟く。

「この国を、恨むか」

触れればさらりと逃げる細い髪を一房持ち上げて、唇につける。

眠っている今しか言えない言葉。

彼女にとっては、きっと投げつけるだけで、凶器に成り得る。

それでも、思わずにはいられない。

「アキ、お前は俺たちを見捨てるか」

当人に見てみたら、酷いといしか言いようのない言葉だと知りながら、零れる言の葉を止められなかった。

本当のことを知れば、お前は俺達を見限るだろうか。

花嫁は、その意味とはまた別に、救国の役割を担うことがある。

始まりは、本当にただ巻き込まれただけの人間が、居場所を得る為だけだったこの婚儀。

いつしか国が揺れ、倒れそうになると、異世界の人間が現れるようになった。

花嫁は、その存在自体が生ける伝説であり、民の救いと成り得るのだという。

本来は何の力も持たない花嫁達故に、結局それは思い込みでしかないのが現実だ。

それでも、花嫁が現れたというだけで、民意は上がる。

荒れた情勢も、やがては好転していく。

精神面で、民は花嫁に勝手に救われ、国を建て直すことが出来た。

王家は、それを利用しながら、今までを繋いできた。

花嫁達の中には、指導者として頭角を現し、実際に救世主として国を率いた者も居る。

武力面では力ならずとも、真実精神的な救世主として、表舞台で起った者も居る。

だが、そんなことが出来るのは、ほんの僅かな一部だけだ。

「・・・お前は、どうする」

するりするりと、艶やかな髪を弄びながら、呟くように問う。

こんな幼い少女に問うたところで、どうもなりはしない。

それを知りながら、問わずにはいられない己が居ることを知る。

俺は、王に忠誠を誓っている。

それでも、この少女が悲しむことのないよう、願わずにはいられない。

「アキ、お前はお前の望むまま、生きていけばいい」

誰にも支配されず。

誰にも束縛されず。

誰にも屈服することなく。

思うがままに、生きていけ。

涙の乾いた跡が残る、肌理の細かい柔らかな頬を、親指の腹で撫でた。

長いまつげの乾ききらない雫が光を反射している。

象牙色の肌は薄紅色を仄かに残すばかりで、そのあどけなさに知らず目元が緩む。

頬を撫でるこちらの手に、猫のように擦り寄ってくる様をいじらしく思う。

さらりと長い髪が揺れた。

色素の薄い髪は、こちらへ来たときよりも色が落ちてきているように見えた。

「・・・時間が、ないな」

変化は既に始まっている。

アキに抗う猶予は、残されてはいないのだ。

いずれその頂に金の光を宿すであろう異世界の少女を見つめながら、アーノルドは静かに息を吐いた。

閑話 その時の黒い人3（後書き）

あれ・・・どうしたんだアーノルド。

悲嘆とあんしん

ぱちり、目が覚めて、違和感を感じた。

「・・・・・・アーノルド？」

前回同様端正なお顔が眼前にあるのは、まあ初めてではないので置いておく。

違和感の正体は、きゅっと握られた、左手。

胸の内から湧き上がる、どうして、という思いと、瞬く間に満たされる心に、戸惑いが隠せない。

過保護なのは、きっと最初から。

無愛想だし、喋らないし、扱いが大雑把なおかげで一番最初は怯えたけれど。

抱き上げられるのも頭を撫でられるのも、既に慣れてしまった。

こどもの姿なのだ、扱いが幼い子に対するものなのは仕方がないし。本当は、慣れてはいけないと、内心想ってはいた。

慣れてしまえば、それがなくなっただけが恐ろしくなるのは目に見えていたから。

そう、思っていたのに。

「・・・・・・」

すり、と繋がれている手に頬を寄せる。

無意識下で自分とは違う大きな手に擦り寄りながら、身を包む安心

感に、目を閉じた。

安心、する。

今、たった一人で目覚めなくて、良かったと思った。

初めてアーノルドの過保護っぷりに感謝をして、そう考えた自分に苦笑する。

世界を勝手に超えさせられたことは、今もとても腹立たしい。

元の世界に戻れないと言われたことが、何より悲しくて仕方ない。

未来の夫まで決められてしまったことに、ひどく虚しさを感じる。

愛する人たちに会えないことが、苦しくてたまらない。

それでも。

「・・・目が覚めたか」

すぐ傍で聞こえた声に、閉じていた眼を開き、視線だけをそちらへ向ける。

こちらを見つめてくる静かな湖面のような青い眼と視線が絡まった。無表情な、綺麗な顔。

けれど今では、その声音に、その眼に、こちらを気遣う心があることを知っている。

「アーノルド」

「なんだ」

小さく、名を呼んだ。

繋がれた手をそのままに、もう片方の手で頭を撫でつつ、アーノルドが返事をする。

その手の温もりを甘受しながら、尚もすりすりとは繋ぐ手に頬を擦りつけた。

「・・・アーノルド」

「ああ」

意味もなく、名を呼ぶことを繰り返す。

不思議と風いだ心からは、ただ恋しさだけが沸くようだった。

何を言うでもなく、責めるでもなく、応えてくれる声とこの手があることが、有り難かった。

「今、一緒にいてくれて、ありがとう」

傍にいてくれて、ありがとう。

きゅ、と握る手に力が込められたのがわかった。

本来ならば、現状に憤って然るべきだと思うのだ。

アーノルドは所詮この世界の人間で、極端に言ってしまうえばアキの敵ともいべき人間だ。

信頼すべきではない、そう考える自分がいる。

なのに、心から湧き上がる、この思いはなんなのだろう。

どうしてこんなに嬉しいの？

じわり、視界が滲んで、アーノルドがぼやけて見えなくなった。ぼろぼろと眼の端から零れてゆく涙をそのままに、ただ呟くように繰り返した。

ありがとう、ありがとう、ありがとう。

「……泣くな、」

そつと涙を拭う無骨な、けれど優しい手に、思わず目を瞑った。押し出された涙が、またころりとシーツに落ちた。

頭の片隅で、傷ついたところに優しくされて、絆されただけなのかもしれないと思った。

優しくされて然るべきなのだ、こちらは被害者なのだから。

そう思うことは簡単だ。

優しくされて泣く必要がどこにあるのかと。

なのにアキは、涙を止められなかった。

悲しくて悔しくて寂しくて腹立たしくて、たまらなく苦しい。

けれど。

愛おしくて恋しくて、泣きたいくらい、嬉しい。

「アキ、泣くな」

不器用な手が頬を拭う。

不意に繋がれていた手を放されて、その喪失感に胸を突かれ、思わ

ず動揺した。

けれどもすぐに両頬が温もりで覆われ、アーノルドの両手に包み込まれたことを知る。

親指の腹で涙を拭いながらのアーノルドの声が、何故か泣きそうに頼りなく聞こえた。

瞑っていた目を開けて、アーノルドの顔を見つめる。

きゅ、と眉根が寄せられた様は、きつと常なら怒っているように見えるのだろう。

端正な顔なのに、その厳つさからアーノルドは周りに誤解されがちなのだろうということが目に浮かぶ。

「泣くな」

アキがじつと見つめるその先で、青い湖面は悲しげに揺れていた。

零れる涙は、もはやアキから離れて止められようもない。

そのことを申し訳なく思いながらも、アキは両手を伸ばしてアーノルドの頬に触れた。

泣くな、と幼子にいうのは、とても酷なことなのだ。

なのに言った本人のほうが目がひどく傷ついた目をするから。

「泣いてません」

「・・・泣くな、」

「泣いてないです。」

泣いてないんですよ、アーノルド」

目から流れてゆくものは、この際無視することにした。

彼が悲しむからと、思わず相手を慰めたくなくなってしまつて己の愚かさを内心で嗤う。

でも、この後はきっと大丈夫だと思う自分がいることも、また事実だった。

この人は、何があろうと傍にいてくれる気がするから。

確かにこの心を守ってくれようとしているのがわかるから。

「わたしは泣いてません。大丈夫ですよ、アーノルド」

零れる滴を無視して、アキは朗らかに笑った。

悲嘆とあんしん（後書き）

人間側が誰も知らない事実その？

花嫁は、こちらの世界の人間を恨むことや憎むことは出来ない。
ただし怒りはそれに付随しない。
これは神の加護の1つ。

ゆれうつく心

「大変、申し訳御座いませんでした。

．．．．アキ様、そろそろ許して下さいませんか」

「いやです」

「．．．．．」

反射的に、即答で拒絶する。

なんとも言えない沈黙が部屋を満たすが、アキがそれに頓着することとはなかった。

何故ならば、今彼女は大層不機嫌であった。

「昨日は言いすぎました、謝ります。すみませんでした」

怒って泣いて、安心したあとの、翌日の早朝。

ファリースはまだ明け方とも言うべき時間に、アキの知らぬ間に退

出していたアーノルドを伴って部屋に現われると、開口一番アキへ謝罪した。

その声に無理やり起こされた形になり、瞬く間に不機嫌になったアキは、それに対し何を言うでもなく胡乱な眼でファリスを眺めた。

一体何を言っているのかと。

ていつか今何時だと思っているんだろうか。

時計がないからわからないが、まだ明るくなりかけている頃なのだから、明け方といっても過言ではない。

もとより朝に弱いアキは、ファリスに対する心証が良くないことも相まって、酷く不機嫌だった。

昨日のことも相当腹に据えかねるものだったが、今は何よりこんな朝早くから起こされたことが腹立たしい。
ていうか許せないかもしれない。

「なにがですか」

幼い少女にしては、低い声が出た。

アキとて、いきなり、てめえ何の用だとは思っても言わない分別くらいはある。

いくら寝起きで頭が働かず、非常に不機嫌であろうとも。

しかし、それ以上に苛立ちが勝って、どうにも宜しくない対応しかできない。

少なくとも、今は無理としか言えないのだ。

「なにが・・・とは」

寝起きでばさばさの頭、不機嫌そうに眇められた眼、低い声とふてぶてしい態度。

幼女には不似合いであるその様に、ファリスも動揺が隠せなかったらしい。

アキの言葉を鸚鵡返しするのが精々な様子で、目を見開いて固まっている。

「こんな朝っぱらから、何を謝りに来たんです」

「・・・いえ、ですから・・・昨日、あなたに対して言いすぎたと反省しまして・・・」

「あなたが謝る必要なんてないです」

ぶつすーとした顔を崩さず、ファリスの言葉を遮った。

泣いて体力を消耗したせいか、幼い身体故か、眠くて眠くてたまらないのだ。

そんなくだらないことで起こされるなんて、とますます腹が立った。

「言い方が非常に意地悪だったとは言え、昨日の話に嘘はなかったんでしょう。」

変に事実を隠されるよりは、本当のことを話して頂いた方がましです。

それとも、昨日のお話に嘘があったのですか」

問いかけるでもなく、断定的な言い方をするアキに、ファリスが寸の間顔を歪めた。

けれど、すぐに真剣な顔でアキを見つめ、真摯に返答した。

「いえ、全て真実のみをお話致しました」

「ならいいじゃないですか」

「ですが・・・」

「謝らないでください」

そんなものでもいいとばかりに、思いきり良く切り捨てる。

そうこうしている間にも眠気はじわじわなくなっていくているのだが、如何せん悪くなつた機嫌はそうそう良くないものだ。

今はなんだか何でもかんでも否定したい気分だった。

まさしく子どもの癪癢と云つていいアキの様子に、ファリスが困つた顔をする。

ちなみに事の起こりから全て見ているアーノルドは、いつの間にか椅子に座つて傍観体勢に入っており、ファリスの助けにはならない。

むしろ問題外だ。

「アキ様・・・」

「様付けしないでください」

「いえ、花嫁は神の巫女と同義ですから、それは・・・」

「様付けしたら返事しません」

「アキ様・・・」

「知りません」

「・・・」

アキとて、くだらない意地だとは分かっている。
神官長としてのファリスが、おいそれとアキを呼び捨てにするこ
とが出来ないことも。

昨日までのアキなら、渋々ながらそれを受け入れていた。
しかし今、アキは腹を立てていることで、多少わがままになってい
たと言える。

謝られるのも、様をつけて呼ばれるのも、アキは嫌なのだ。

そして、ここで冒頭に戻る。

「・・・アキ」

再度の謝罪を即答で拒絶されたファリスが、頭を下げたまま固ま
り、動かなくなつて暫し後。

見るに見かねて、ようやくアーノルドがアキに許しをもらつべく、
声をかける。

しかし、その声にも無反応で、アキは顔を顰めたまま壁を睨みつけ
ていた。

「・・・アキ、」

「いやっていったらいや!」

再度の呼びかけすら拒絶して、遂にはシーツの海へ潜り込んだ。

困ったようなアーノルドの声も、未だ固まるファリースも、最早どうでもよかった。

むくむくと心の内で湧き上がる怒りに翻弄されて、アキ本人ですらどうしたらいいかわからない。

こんなにこどもっぽかったのだろうか、なんて頭の中の冷静な自分が独りごちる。

白いシーツに突っ伏して、込み上げる涙を堪える。

どうも先日から、情緒不安定だということは自覚していた。

見た目に引きずられているのか、唐突な出来事が連なって起こったせいで精神が退行しているのか。

それすらもアキにはわからなかった。

悲しくて悲しくてたまらなくなって、じわじわと出てくる涙がシーツに染みていく。

アーノルドの前では笑えたのに、何故なのか。

昨日はもう大丈夫だと思えたのに、錯覚だったのだろうか。

「やだ！ファリースのばか！」

「・・・」

「・・・」

シーツの中から叫べども、返ってくる答えはなく。

ただただ、アキは必死でそれ以上の怒りが口から出ないようにするほかなかった。

青いめ

シーツの海から頑として出てこなくなってしまったアキに、どうすることも出来ず、ファリースはまたすごすごと退出していったようだった。

本当は、昨日のことも、起こされたことに対しても、もう怒ってはいないのに。

そう、これはただのやつあたりが正解で。

誠心誠意、ファリースが申し訳ないと思って、謝りに来てくれたことはわかっていた。

けれど、それを素直に受け入れることが、今のアキにはどうしても出来なかった。

「・・・アキ、」

ぽん、と頭の上に温かな重みが加わると同時に、ぽつりと落される声。

ファリースが出て行った後も、アーノルドはやはり部屋に残っていたように。

静かにベッドへと歩みよるとアキの頭があるだろうと思わしき所へ手を置いた。

名を呼びはしても、それ以上のことは何も言わないので、アキも歯を食いしばったまま無言を貫く。

申し訳なくて、悲しくて、吐き気がするほど自分が嫌いになった。

「・・・」

「・・・ふ、え」

優しく撫で摩る温もりに引き摺られるかのように、泣き声が口から零れていく。

泣きたくない、こんなことでアキが泣くのは間違っているとわかっていて。

「・・・やだあゝ・・・うえええ」

ぐずぐずと鼻を吸りながら、か細い声で呻く。

こんな自分が、信じられない。

昨日あれだけ泣いて、あれだけ怒鳴って、すっきりしたはずなのに。

どうしてこんなに弱いのだろう。

どうしてこんなに面倒臭いんだろう。

どうしてこんなに汚いんだろう。

どうしてこんな

ばさり、

「・・・アキ」

身体全体を覆っていたシートが取り払われ、次の瞬間には引き起こされていた。

両脇の下に手を入れられた形で、膝から下はまだベッドにくっついて

いる。
アーノルドと顔を合わせたくなくて、合わせられなくて、ひたすら下を向いて泣き続ける。

こんな顔、見せられない。

「アキ、上を向け」

「・・・や」

弱弱しく頭を振りながら、震える声で、尚も拒否をした。

呼ばないで。呼ばないで。

お願いだから、触らないで。

・・・優しくしないで。

これ以上、頼ってしまいたくなる前に、その手を放して欲しい――

「アキ」

「っ！」

ぐいつ

突然の浮遊感と身体を拘束される圧迫感を感じたと思った次の瞬間には、顎を掴まれて上を向かされた。

身体も、いつの間にかベッドに腰かけていたアーノルドの膝の上。

片腕で腰を拘束され、もう片方で顎を掴まれていた。

強制的に絡ませられた視線が、どうしてか、放したくても放せない。

「・・・あー、のる、ど・・・」

舌つたらずな呼び声に欠片も反応をくれず、ただ真っ直ぐ、射抜くように見詰められた。

頬を温かい涙が伝ってゆく感覚が、何故か今は遠い。

どうして、どうして、どうして、

困惑する頭はしっかり動いてくれず、ただ疑問だけが巡り続けている。

アキは今まで、目を見れば大体相手の気持ちがわかんと思っていた。なのに。

今、アーノルドの気持ち、さっぱりわからない。

どうして、そんなに苦しそうな。

どうして、あなたが

「アーノルド・・・泣きそう？」

「・・・いや、」

え、もしや、もらい泣き？

何処からか突発的に出てきてしまった発想に不意を突かれ、涙が止まる。

ようじょに　だいのおとなが　もらいなき。

「ふふっ」

一瞬きよとん、とした後、思わず笑ってしまった。

おまけに、アーノルドの泣き顔まで想像して、無駄にダメージを食らう。

まだ彼は泣いていないというのにも関わらず。

しかし、やっぱりどうしても、アーノルドに泣き顔は似合わないのだ。

「・・・どうした」

さっきまで泣いていて、いきなり笑いだしたアキを前に、アーノルドが静かに問う。

その眼はもう、いつものアーノルドだ。

たったそれだけのことに、何故か酷くほっとした。

「んーん、なんでも」

くつくつと笑いを押し殺しつつ答えるも、込み上げる笑いが地味に腹筋を攻撃する。

重力に引かれるように、アーノルドの肩へ額を押し付けた。
何を言うでもなく、それを黙って受け入れてくれることに、胸が温まるような心地になる。

さらりと頭を撫でてくれる手も。

重さなど関係ないというように抱き上げる腕も。

アーノルドの側が、心地好い。

・・・ああ、そうか。

不意に、合点が行く。

笑いを納めて、真っ直ぐにアーノルドの目を見つめた。

涼やかな、透き通る湖の様な青い瞳。

この目を見ていると、何故か不安定だった心が落ち着いて行くのを
実感して。

「・・・アーノルド、ファリスのお部屋はどこですか？」

「・・・・・・・・行きたいのか」

「というか、お部屋に戻られてるんじゃないかなと思って」

「多分、今は神殿のほうだろう。お前の体調が許すなら、連れて行く」

「ありがとうございます、お願いします」

抱き上げてくる腕に抵抗することなく身を任せ、見つめてくる目を見て微笑んだ。

この人の側なら、きっと大丈夫だと思う自分は、きっと依存傾向にあるのだと思う。

未だ不安定で、自分に対しての不信感は拭えないけれど。

例えどうなったとしても、この腕が拾い上げてくれるような気がするから。

「アーノルド、お昼は3人でご飯が食べたいです」

につこり笑って、おねだりをした。

青いめ（後書き）

人間側が誰も知らない事実その？

花嫁が一番最初に出会った異性に、刷り込みのような現象が起こる。その後、その人間は花嫁の精神安定剤としての役割を併せ持つ。

しやざいと思わぬ展開

ぼん、一度だけ頭に乘せられた温もりに力を得て、扉の前から逃げ
てしまいそうな己に活を入れた。

とん、とん、とん、

「・・・はい、どうぞ」

「・・・・・・」

「・・・」

「ぎゅり、

「・・・？どうぞー」

「・・・っ」

「・・・」

室内からかかる声が僅かに沈んでいたように思えて不意を突かれ、
うつかり声を飲み込んだ。

2度目の応えにすら答えられず、ぱくぱくと無意味に口を開閉する。
しーん、と沈黙が漂って、余計に自分の首が締まるような気がして

ならない。

やっべ、どうしようこれ。

うわあああしくったああ！と内心で奇声をあげつつ、緊張故に返答もままならない自分が口惜しい。

せっかく、わざわざアーノルドに神殿まで連れてきてもらったのに、その辺を歩いていた神官さんに尋ねれば、今は神官長の部屋に居るとのことだった。

部屋の前まで来たところでアーノルドに下に降ろしてもらって、一旦深呼吸。

初めから自分がやりたいから、とアーノルドにお願いしたのはアキ本人だ。

つまりこればかりは、彼の手助けはもらえない。しかし。

「・・・どなたですか？」

「・・・っ！」

っああああ、声に不信感が籠ってるううっ！！

扉をノックしたまでは良かったが、そこから先に進めなくなってしまった。

かちーんと固まってしまったアキを見下ろすアーノルドの視線が、後頭部に突き刺さる。

「・・・アキ？」

「だ、ただだってえええ！」

だって、なんか、なんかね！

小声で呼びかけてくるアーノルドに、半泣きになりながらこちらも小声で返す。

チキンハートだと自分で公言しているわたしですよ！
意味もなく言葉を繋ぐも、それで現状が覆るわけではなく。

かちゃ、

「・・・一体、何をして・・・おや」

「はうっ！！」

どつきーん！

扉の前でごちゃごちゃやっている間に、ファリスが出てきてしまった。

あまりにも驚いて、思わず心臓のあたりを押さえる。
危うく口から中身が出るところでした。

「アキさ・・・・・・・・・・」

沈黙。

呼びかけようとしたファリスが、途中で詰まった後、困った顔になる。

先刻、様付けをしたら返事しないとアキが言った為なのだろう。
律儀に言いつけを守るその様を見て、アキもまた、情けなくも口を

噛みしめる破目になった。

ちがう、ちがうの。

そんな顔をさせる為に、ここまで来たわけではないのに。

「あの、ファリス・・・あのね、」

「・・・はい、なんでしょう?」

意を決して口を開くもその先が出てこず、喉の奥で悶えてしまう。
かーっと顔が熱くなり、服を握りしめる手が汗ばむ。

アキは、このときようやく、自分は誰かに謝るのがとても苦手であることを思い出した。

今までは、このような事態にならないよう上手く立ち回ってきた為、実は未だに慣れないことなのだ。

まさか、そのツケがこんな形で自分に帰って来るとは、思いもよらなかった。

「・・・あの、あの・・・ええと・・・」

もじもじもじよもじよ。

口の中で、謝罪の言葉が蠕る。

さっさと言ってしまわねば、ファリスがまた不審に思うだろうに。

「えとね、ファリスに、言いたいことが・・・っ」

ある、のです、が・・・

そう言いながら、勝手に追い詰められて、視界が滲んではやけてしまった。

言葉が尻すぼみになってゆくのが、情けなくてたまらない。

謝るだけなのだから、早く言ってしまえばいい。

そう理解しながらも一向に出て来てくれない声に、焦りが募る。困惑の極みに達するところで、唐突に、涙腺が決壊した。

「あ」

「うつ」

「え？」

アーノルドが無表情で呟き、アキが呻くように泣き声を漏らし、フアリースが困惑して音を零した。

「え、あの、アキさ……アキ、さん……？」

「……ふ、うう……っ」

「アキ？」

ぐしゃぐしゃに崩れた顔で泣きだしたアキを、アーノルドが腕に抱きあげ、顔を覗き込む。

フアリースが苦肉の策とばかりにようやく名を呼ぶのも聞こえぬように、アーノルドを凝視したままぼろぼろと涙を零した。

「アキ」

ぐつと唇を噛み締めて、せめて泣き声だけでも零さぬよう、必死になって耐える。

どうしてこんなところで泣いてしまうのだろう。

やだやだやだ、泣きたくない。

けれど、アーノルドに名前を呼ばれて、それも決壊してしまった。

「うつ・・・うええええん、ファリース、ご、ごめんなさい！」

「えっ」

「・・・」

元凶私ですか！と驚いて固まったファリースを前に、恥も外聞もなく、わあわあと大泣きする。

もはやファリースにとっては迷惑と言わざるを得ない状況になってしまった。

何事かとあちらこちらから神官さん達が現れて、こちらを覗いてくるのも全く気にする余裕がない。

傍から見れば、完全にファリースが悪者である。

実際元とは言えばファリースのせいではあるのだが。

「アーノルド、とりあえず中へお連れしてください」

大層焦ったファリースも意識の外に、ひたすら泣き喚く。

混乱はピークに達して、アキの脳内はパニック状態だった。

わけもわからぬまま、アーノルドに抱き上げられ神官長のお部屋へ入場したのだった。

仲直りして、ようやく

「・・・さて、落ち着きましたか？」

「あい・・・ごべんなざい」

ぐじゅぐじゅと鼻を吸いながら、しょんぼり頭を垂れた。
全くもって申し訳ありません。

「いえ、構いませんよ。」

わざわざこんな所まで来て下さってありがとうございます。
それで、どうしたのですか？」

につこり笑いながらそう問ってくるファリスが、何故かこちらを
拒絶しているように感じて、思わずうるりと涙が滲む。

それを見たファリスが若干顔を強張らせたのを見て、ぐっと唇を
噛んだ。

情けなくてたまらない。

勿論、自分に対してだ。

・・・あ、ちなみに席はやっぱりと言うかアーノルドの膝の上です。

これデフォルトにされると困ると思うんだがどうか。

あと涙拭いてくれるのは有り難いけど袖口の布が堅くてちょっと痛い
です。

「泣かないでください・・・」

心底困った様に、ファリスが頂垂れる。

声にも張りがない辺り、疲れているようだ。

「ご、ごべんなさい・・・でもあの、ち、ちがむぐう」

「はい？」

「んぶぶ・・・あり、ありがとうございます、アーノルド・・・。
あのわたし、ファリースに謝りたくて、来たんです。
困らせたいわけじゃなかうぶぶ」

「アキ、鼻をかめ」

「うー」

「・・・あの、アーノルド、ちょっと手を出さないで頂けますか」

こちらが必死で言葉を続けようとしているのに、背後のアーノルドが涙を拭ったり鼻をかませてくれたりするおかげで、なかなか進まない。

思わずファリースも止めに入る程、見るに見かねる状況だったらしい。

ものすごい微妙そうな顔をしてこちらを見ている。

ていうかアーノルドがナチュラルに世話をしてくれるおかげで、うっかり為すがままになっていた。

しかし乙女としては父親でもない男性に鼻水の処理までされるとは如何なものだろうか。

素直に従ってちやいかんだろう自分よ。

「すみません、ありがとうございます・・・。

・・・えと、さっきは話をちゃんと聞かないで我儘言っちゃいまし

た。

ファリースの立場なら、そう気軽に呼べるわけじゃないのも、考えればわかったのに。

「早朝から叩き起こされて眠くて、完全に八つ当たりでした」

だから、ごめんなさい。

ファリースの真正面に向き直って、ぺこり、と頭を下げる。

お許しの言葉が出るまでそのままの体勢でいると、ぽん、と頭の上に手が置かれた。

ちらりと見上げれば、それはアーノルドの手で、そのままなでなでされる。

・・・和む、和むが、それを今やっちゃうのはどうなの。

アーノルドはKY（空気読めない）とAKY（あえて空気を読まない）のどっちなの。

真剣な空気が一気に弛緩しましたよ。

しかしここは無理やり戻す！

「未だに、腹が立つものは立つし、王様や神様にお会いしたらどうなるかわかりません。

だからと言って、それを全てあなたに押し付けるつもりもないんです。

だってそんなの重すぎるでしょう」

「・・・いえ、あなたには、泣いて怒る、正当な権利があります。謝る必要はないのですよ。

元はと言えば全て私に責が、そういう立場に在るのですから。」

「そうかもしれませんし、そうじゃないかもしれません。」

わたしには難しいことはわからないけれど、でもさっきのは明らかにわたしが悪いんです。

だって謝りに来てくれたのに、それを話も聞かずに追い返したわけですから。

昨日のことも、呼び方も、一度謝って下さったから、わたしはそれでもう良かったんです」

「アキ様・・・」

あ、戻った。

その速い反応に、笑いがこみ上げる。

ふと悪戯心が疼いて、ファリースの顔を覗き込みながら、願望を口にしてみた。

「本当は、アーノルドみたいに呼び捨てしてくれると尚嬉しいんですけど？」

「いえ、申し訳ありませんが、無理です」

につこり笑顔で、どきっぱり断られました。

うむ、しかしそれでこそファリースだ。

でも無理っていうな寂しいじゃないかこんちくしょう。

「うん、じゃあいいです」

「・・・やけにあっさり引き下がるな」

背後から、ファリースじゃなくてアーノルドから突っ込みを頂いた。おっと珍しい。

そんなに違和感ありましたか。

てかなんか暗にわたしが頑固でわがままて言ってるかもしれない。

「いいんです、本当は無理させてまで我儘を押し通したいわけではないので」

うん、これで本当にすっきりした。

胸の悶えがなくなって、おかげでじわじわ顔が崩れていくが、それも仕方ないと思う。

終わりは微妙だが、実際仲直りにはなっただろうから。

誰かと不和なままで居るなんて耐えられない性分なのだ。

やっと人心地つけるような気がした。

そうして一区切り出来たところで、今は昼に近いことに気付いてしまった。

「お腹が空きました・・・」

くきゅ〜と情けない腹の鳴き声が辺りに響いた。

実はここに来てから、泣いたり寝たりしてたおかげで一食しか食べてない。

寝てる間はそう問題もなかったが、如何せん子どもの体は燃費が悪かったりする。

今まで勢いでなんとかやってはいたが、ここですっかり力が抜けてしまった。

アキの身体は、空腹になると完全に力が入らなくなるがそれは小さくなくても変わらないようだった。

ファリスが苦笑して、アーノルドに凭れるアキの頭を緩やかに撫でて言った。

「では、少し早いですが、食事に致しましょうか」

その言葉に押されてか、余計空腹感が募ったのには心底参ったアキ
だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495u/>

ダンデライオンの花嫁

2011年11月12日11時01分発行